

桐朋学園芸術短期大学紀要 Vol.3
2007年3月発行

「ヴァルトブルグの歌合戦」伝説

上尾 信也

目次

はじめに ヴァーグナーと《タンホイザー》

I グリム兄弟の『ヴァルトブルクの歌合戦』

1.グリム兄弟の『ドイツ伝説集』

2.グリムのドイツ伝説集にみる「ヴァルトブルクの歌合戦」

3.物語の構図

II 「歌合戦」の原典—中世文学としてのヴァルトブルク

1.『ヴァルトブルクの歌合戦』の原典

(1)原典(Quellen)

(2)写本(Manuscript)

2.ミンネザンクとしての歌合戦

(1)マネッセ歌謡写本(Codex Manesse)の「ヴァルトブルクの歌合戦」

(2)〈君主賛歌 Das Fürstenlob〉と〈なぞなぞ Das Rätsel〉

3.「歌合戦」伝説

(1)歌合戦伝説の史料

(2)論争詩と伝説

(3)歌合戦写本の成立

III ヴァルトブルクの1200年代(ヴァルトブルクの歌合戦の歴史的背景)

1.伝説の道具立て:聖エリーザベト伝説

(1)歴史上の登場人物の史実

(i)テューリングゲンとヘッセンの方伯ヘルマン

(ii)オーストリア大公レオポルド ルートヴィヒ

(2)「聖女伝説」:歌合戦と聖女の誕生

(i)テューリングゲン方伯夫人エリーザベト

(ii)聖エリーザベト伝の脚色としてのヴァルトブルクの歌

合戦

2.クリングゾールとは何者なのか

3.そして、伝説へ

記憶と記録の融合は、歴史的な事件を印象的に語り継ぐ装置(イメージ)の母体である。伝説はこのイメージの産物であり、また新たなイメージを次々と未来に生み出していく。

はじめに ヴァーグナーと《タンホイザー》

「ヴァルトブルクの歌合戦」は、リヒャルト・ヴァーグナーの楽劇《タンホイザー(タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦)》(1843年)によって広く知られるようになった伝説である。また、舞台となったヴァルトブルクは宗教改革者マルティン・ルターの滞在地としても知られている。

ヴァーグナーによって歌合戦のシンボルとなったタンホイザーとはいったい誰なのか。タンホイザーは、中世ドイツ語による宮廷歌謡をその作者(ミンネジンガー)の肖像のミニアチュールとともに描いた『ハイデルベルク大歌謡写本(マネッセ写本)』にも登場する13世紀の実在の宮廷歌人(ミンネジンガー)であり、十字軍に従軍するなど信仰篤い徳の高い騎士としてタンホイザーは中世末期には伝説ともなっていた。しかし、ヴァルトブルクの歌合戦を記したどの資料にもその名は見当たらない。実はヴァーグナーは、歌合戦に主人公として登場するハインリッヒ・フォン・オフトーディンゲンこそこのタンホイザーだとして、新たな歌合戦伝説を創造したのである*1)。ヴァーグナーのこの芸術的創造性の背景には19世紀ドイツの希求があった。フランス革命とナポレオン戦争以降の、市民社会と国民国家の創生の時代にあり、なおも100あまりの領邦に分立していたドイツ人は自らの統一国家を求めた。その統一のアイデンティティのひとつが、ドイツ民族としての歴史の探求と、ドイツ民族としての文化の創出であった。この歴史主義とロマン主義の19世紀を舞台として歌合戦伝説は、「中世的なるもの」と「ドイツ的なるもの」への強烈な希求が生み出した産物であった。これはまた、歌合戦の登場人物であるミンネジンガーへの憧憬と、一種の芸術家としての彼らの伝説を生み出すこととなった。

伝説は歴史的な事象の断面を伝えるといわれる。本論では、「ヴァルトブルクの歌合戦」が歴史上の事実であるとすれば、

どうして伝説として語り継がれてきたのかその生成過程に触れていく。そして、その生成過程にかかわる、つまり、歌合戦に登場したこの歌合戦を歌い伝え残した宮廷歌人(ミンネジンガー)にまつわる、いわばもうひとつの伝説を解き明かし、中世の詩人、芸術家と評されてきた彼らの実像に、もうひとつの光を照射することを試みてみたい。

I グリム兄弟の『ヴァルトブルクの歌合戦』

1. グリム兄弟の『ドイツ伝説集』

19世紀のドイツの統一への希求は、国語としての言語の確立にも現われた。その主導的役割を果たしたのがヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟である。ドイツ語の確立と辞典編纂のためのドイツ語圏に残るさまざまな言語資料の収集の余録とも言うべき成果は、今日も世界の隅々にまで読者をもつ《メルヒェン(童話)》として目の当たりにできる。一方、メルヒェンとほぼ同時期に10年の歳月をかけて収集された兄弟編の『ドイツ伝説集 Deutsche Sagen』(第1部1816年刊、第2部1818年刊)は、記述資料として歴史上の重要な価値をもっている。ここには、鼠捕りの笛吹き男にまつわる「ハーメルンの子供たち」(244番)といった場所にちなむ伝説362編、「ヴィルヘルム・テル」(512番)や「マルティン・ルター」(556番)のような歴史にちなむ伝説217編、合計579編が所収されている。「童話(メルヒェン)は詩的で、伝説(ザーゲ)は歴史的である。童話は、その本来の開花と完成の姿をとって、ほとんどそれ自身のうちにしっかりと根ざしている。伝説は、色彩の多様性に乏しく、何か既知のもの、意識されているものに、ある場所、または歴史によって確かめられている名に結びつくという特殊性をもっている。」とヤーコプが第1部の序文に要約したように、汎用的な童話に比べ、伝説は歴史的な時や所と密接に結びついている。それゆえ伝説は、イメージとして語り伝えられた特異な歴史的事実の一面の照射であるばかりでなく、「歴史的な伝説はたいてい何か異常なこと、意外なこと、そして超感覚的なことをさえ、ありふれたもの、よく知られたもの、現

存するものに、ぶっきらぼうに、まじめに結びつける。」とヤーコプが述べるように民族固有の心性の表出として歴史学上の対象となる。その意味でも、『ドイツ伝説集』は同時にグリム兄弟の「ドイツ的なるもの」の追及でもあった*2)。

2、グリムのドイツ伝説集にみる「ヴァルトブルクの歌合戦」

『ドイツ伝説集』の第 561 話に「ワルトブルクの歌合戦 Der Wartburger Krieg」はある。ここではまず、桜沢正勝／鍛冶哲郎(訳)『グリム ドイツ伝説集』(人文書院 1990)(下)307-310 ページにより全文を紹介したい(段落後のアルファベット記号は、物語の構図で使用するための引用者による。同訳書の合戦、クリングゾルといったいくつかの表記を引用者が本論中の表記に統一している)。

アイゼナハに近いワルトブルクの城に、1206年6人の徳を備えかつ賢明な心得のある男が集まり、歌を競いあった。後に、人々はこれをワルトブルクの歌合戦[合戦]と呼んだ。(a)

歌匠たちの名は、それぞれハインリヒ・シュライバー、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ、ライマー・ツヴェーター、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ、ピーテロルフ、ハインリヒ・フォン・オプターディンゲンであった。6人の詩人は太陽と昼を歌って競いあった。みながテューリングンとヘッセンの方伯ヘルマンを昼にたとえ、殿の中の殿と讃えたのに対し、ただひとりオプターディンゲンはオーストリアの公爵レオポルドをそれ以上に称賛し、太陽にたとえた。(b)

さて、歌匠たちは互いにこういう取り決めをしていた。それは歌合戦で敗れた者は首を吊される、というものだった。そして、絞首刑吏のシュテンペルが、すぐに吊すことができるように傍らに控えていた。ハインリヒ・フォン・オプターディンゲンは才気を持って巧みに歌ったが、ついには、妬み心からハインリヒをテューリングンの宮廷から遠ざけようとしていた者たちの巧妙な言葉の罠にかかり、負けてしまった。(c)

勝負に敗れたのは謀られたからだ、とハインリヒは訴えたが、他の5人はシュテンペルを呼ぶと、ハインリヒを木に吊すように

命じた。するとハインリヒは方伯夫人ゾフィアのところに逃げ、その外套の下に身を隠した。そうすると5人はもう手出しはできなかつた。(d)

そこでハインリヒは5人と交渉して、一年の猶予を認めてもらったうえ、「その間に、わたしがハンガリーとジーベンビュルゲンに向けて旅立ち、歌匠のクリングゾルを連れてこようと思う。この人に歌の判定をしてもらい、それに従うことにしよう」と申し出て、合意を取りつけた。クリングゾルは当時最も高名なドイツの職匠歌人として認められていた。それに方伯夫人もハインリヒの味方をしたので、5人はこの申し出をしぶしぶ受け入れたのだった。(e)

こうしてハインリヒ・フォン・オプターディングンは旅に出た。まずオーストリアの公爵のもとに赴き、その紹介状を持ってジーベンビュルゲンの歌匠を訪ねた。そして、歌匠にこの訪問のわけを話し、自分の歌をうたって聞かせた。(f)

クリングゾルはこの歌をいたく褒め、共にテューリングンに赴き歌人たちの争いの裁定をしよう、と約束した。ところがその後、2人は様々な戯れ事に興じて時を過ごし、そのためハインリヒに認められた猶予期間は終わりに近づきつつあった。それでもクリングゾルが一向に旅の支度に取り掛からないので、ハインリヒは不安になってこう言った。「師匠、あなたに見捨てられ、一人悲しく旅立たねばならぬのではないかと心配しております。そうなればわたしは名誉を失い、一生テューリングンに戻ることはできません。」クリングゾルはそれにこう答えた。「心配なきるな、こちらには逞しい馬と軽い馬車がある。近いうちにぜひ出発しよう。(g)

ハインリヒは心配のあまり眠ることができなかつたが、歌匠が晩に飲物を与えたところ、深い眠りに落ちてしまった。すると、クリングゾルはハインリヒを皮の敷物の上に横たえた。それから自らもその傍らに横になると、急ぎテューリングンの国はアイゼナハまで運び、いちばん上等の宿に下ろすよう、霊に命じた。果たしてその通りに事は進み、夜が明ける前に、霊は2人をヘルグレーフェンの館に連れて行った。朝の眠りの中でハインリヒは聞き慣れた鐘の音を耳にし、こう呟いた。「これは幾度も聞いた音色のように思える。なんだかアイゼナハにいるような気

がする。」—「夢でも見ているのだろう」と歌匠は言った。起き上がってあたりを見回したハインリヒは、自分はいま本当にテューリングンにいるのだと、すぐに気づいた。「ありがたい、テューリングンに着いたのだ。これはヘルグレーフェンの館だ。聖ゲオルクの門と、その前に立ってこれから野良に出ようとしている人々の姿も見える。」(h)

さて程なくして、2人の到着がワルトブルクの城にも知れ渡ると、方伯は、異国の歌匠を敬意をもって迎え贈物を届けるよう命じた。ハインリヒは、どこでどのように日を送っていたのかと訪ねられると、こう答えた。「わたしは昨日ジーベンビュルゲンで眠りについた。それが今日の朝課の時にはここに着いていたのだ。私の知らぬまにそうなってしまっていたのだ。(i)

歌匠たちが歌を競いクリングゾルが判定を下す日まで、まだ幾日かがあった。ある晩クリングゾルは宿の庭に座り、じっと星空を眺めていた。その場に居合わせた殿らが、空に何を見ているのかと尋ねたところ、クリングゾルは、「よろしいか、今宵ハンガリーの王に娘が生まれることになりましょう。この子は美しく徳高く信心深い乙女となり、方伯様のご子息に嫁ぐことになりましょう」と言った。(j)

この知らせを伝え聞いた方伯ヘルマンはこれを喜び、クリングゾルをワルトブルクの城に召しだすと、一方ならぬ敬意を払い豪華な宴の席へ案内した。食事の後、クリングゾルは歌人たちがいる騎士の館に赴き、ハインリヒ・フォン・オプターディンゲンを自由の身にしてやろうと思った。(k)

クリングゾルはヴォルフラムを相手に歌で渡り合った。ところがヴォルフラムは並々ならぬ勘と機転を発揮し、歌匠に引けをとらなかった。そこで歌匠は霊を一人呼び出した。

霊が若者の姿で現われると、クリングゾルは言った。「私は口を動かすのに疲れてしまった。ヴォルフラム、おまえさんの相手をさせようと、ここに下男を連れてきた。しばらくこいつがおまえさんと戦ってくれるだろう。」霊は、この世の始まりから恩寵の時までを歌いはじめた。ヴォルフラムは永遠の言葉の聖なる誕生を歌ってこれに応じた。そしてその歌がパンと葡萄酒の聖なる化体を扱う段になると、悪魔は沈黙してその場を去らねばならなかった。)(1)

ヴォルフラムが学ある言葉で神の不思議を歌うのを一部始終傍らで聞いていたクリングゾルは、この男は多分学者でもあるのだろうと思った。それを潮に二人は別れた。(m)

ヴォルフラムは町の中心部、パン市場の向かいのティツェル・ゴットシャルクの館に宿をとっていた。そのよるヴォルフラムが眠っているところに、またしてもクリングゾルは悪魔を使わし、学ある者か無学の者か調べさせた。この歌人は、実は神の言葉に通じているだけで、他に学芸の心得とてない無学な男だった。悪魔は天空の星について歌い、ヴォルフラムに質問した。歌匠がこれに答えることができず、黙ってしまうと、悪魔は大声で笑い、石の壁がやわらかい練り粉でもできているかのように、指で壁にこう書いた。「ヴォルフラム、おまえは無学なおしゃべり野郎だ。」そうしてしまうと悪魔は姿を消したが、その文字は消えずに残っていた。(n)

ところが、この不思議を一目見ようと沢山の人押し寄せたため、宿の主人は腹を立て、その部分の石を壁から外させホルホゼ川に捨ててしまった。(o)

クリングゾルは悪魔にこの悪戯をさせた後、方伯に暇乞いをし、頂戴した褒美や贈物を携え召使を連れ、皮の敷物に乗って、来たときと同じように国に帰って行った。(p)

3、物語の構図

以下ではグリムの物語からうかがえるこの歌合戦の構図を、物語の進行順にアルファベットで示し要約し、その後の議論の手がかりとしていく。

第1部

(1) 事件としての歌合戦

(a) 現場：

チュービンゲン地方アイゼナハ近郊ヴァルトブルクの城。『グリム ドイツ伝説集』訳ではワルトブルクの城

(b) 登場と歌合戦：

伝1206年、参加歌匠は、ハインリヒ・シュライバー、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ、ライマー・ツヴェーター、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ、ビーテロルフ、ハインリヒ・フ

オン・オフターディンゲン。「歌匠」と訳された原綴は「Meister」、後述するがこの伝説が収集された時代のマイスタージンガーにとっての宮廷歌人(ミンネジンガー)は自らの祖先の意識をもってマイスターとしたのではないかと思われる。

太陽と昼を仕える領主に準える勝負を行い、ハインリヒ・シュライバー、ヴァルター、ライマー、ヴォルフラム、ビーテロルフは、ヴァルトブルク城主にして歌合戦の主催者テューリンゲン・ヘッセン方伯ヘルマン側につき、ハインリヒ・フォン・オフターディンゲンのみオーストリア公レオポルド側につく5対1の勝負。

(c)勝負の帰結：

ハインリヒの負けだが、グリムの『伝説』ではハインリヒに好意的な「妬み心、畏」といった理由付けがなされている。

(d)再審判の申し出：

方伯夫人ゾフィアの取り成しによる再審判が決定される。正義の女神然とした方伯夫人の中立性は、「貴婦人の外套の下」という表現から、夫人が単なる避難場所ではなく、宮廷風恋愛における主君の奥方と歌人のフィナモール(精緻な愛)を想起させる。しかも、ゾフィアは実はオーストリア公家の出身であり、後世による政治的な位置づけの意図が見え隠れする。

(e)歌合戦に負けたハインリヒ・フォン・オフターディンゲンの職匠歌人(Meistersänger マイスターゼンガー)「クリングゾール(クリングゾル)の探索：

当時随一の歌匠とされるジーベンビュルゲン(今日のルーマニア)のクリングゾールは、後世16世紀に宮廷歌人(マイスタージンガー)の作品を範とし編纂した職匠歌人(マイスタージンガー)と記されている。ミンネジンガーとしてのクリングゾールは今日では歌合戦以外知られておらず、架空の人物とする説もある。

(2)探索の旅

(f)オーストリアの公爵：

(g)クリングゾールとの出会い：

思惑と遊興譚が繰り広げられる。これはクリングゾールの権威と魔力を見せ付ける道具立てのひとつであろう。

(h)魔術師クリングゾール：

「薬」、「魔法の絨毯」など魔力が開示される。睡眠薬であろう不思議な飲物、や千一夜物語などイスラムの物語で知られる「空飛ぶ敷物」、あるいは、これは16世紀以来のオスマン影響下のハンガリーのイメージと結びつこう。また、覚醒や郷土復帰の道具立てとしての鐘の音や霊(悪魔)を使う者としてのクリングゾールの特徴づけは、近代以降の「音」観念や芸人楽師の在り方にも繋がり興味深い。

(i)ハインリヒの帰還の報せ

第2部

(3)再戦：ヴォルフラム対クリングゾール

(j)予言：

予言や奇跡は宮廷での信と尊敬と愛顧を得るための魔術師の宮廷への典型的な登場パターンであり、この予言は前掲書『グリム伝説集』563「ルートヴィヒとエリーザベットの2人の子供の結婚」に繋がっていく。

(k)方伯の宴会

(1)ヴォルフラム対クリングゾールの歌合戦：

新たな主人公ヴォルフラムはまっとうな技芸の持ち主、神の側として描かれ、霊を呼ぶクリングゾールはアンチクライスト、悪魔使いとして描かれる。これは、霊が歌う〈この世の始まりから恩寵の時まで〉と、ヴォルフラムが歌う〈永々の言葉の聖なる誕生〉の絶妙な対比である、後者はパンと葡萄酒の聖なる化体、最高の秘蹟としての聖体拝領といった14,15世紀のキリスト教ルネサンスともいえる信仰再認の時代に多くの言説が割かれた*3)。

そして、悪魔退散により一応のヴォルフラムが勝利したかにみえたが、クリングゾールは冷静に判断し、「学識」判定を求める。単に、キリスト教に対する理性、古典的学識の対立なのだろうか。伝説が成立した時代の精神史的背景が現れたと見るか、スコラ神学の影響と見るか。

(m)クリングゾールとは決着つかず、学識判定へ。

ちなみに、学識の判定こそ、クリングゾールの登場するヴォルフラム作の『パルチヴァール(パルツィファル)』には欠落した要素であるが、なぜこの伝説は「無学＝歌人」を伝えたのだろうか。

(n)夜の宿屋での悪魔とヴォルフラムの再戦：

クリングゾールは悪魔を使わし学識判定を行なう。悪魔の歌「天空の星について」は天文学の知識さらには自由七科に唾がル「大学的教養」である。それに対して無学と分かったミンネの歌人を悪魔が笑う。歌人の社会的地位についての示唆といえるかもしれない。

(4)後日談：

(o)宿に残った悪魔の傷痕：

不思議譚では、伝説の後日談でこの種の証拠隠滅を行う。立証不能な「事実」への言い訳の常套手段である。

(p)クリングゾールの帰還についての後日談

結局は方伯による贈物によってクリングゾールの勝利の図式に一見みえるが、歌合戦の決着やヴォルフラムと論争の結果は等閑視され、どうしてクリングゾールの予言とそれに対する報酬が伝説の結幕となるのか、古典的連続的な物語の筋立てとしては不可解である。つまり、歌合戦、クリングゾールの探索、予言、ヴォルフラムとクリングゾールとの論争といった個別の逸話が時系列にしたがって集められ、物語の筋書きに無理やり合わせたことで、いくつかの齟齬や関連性の希薄さが見受けられる。このことはたとえば、後半第2部は、ハインリヒについての言及はなくなる。物語構成上、単なる狂言回しともいえようが、伝説主題の主眼は「クリングゾール」的なる者と「ヴォルフラム」をはじめとする歌人への視線へと移っていくことは、いかにもパッチワークの感を否めない。これは後述の成立事情で明らかになる。

また、物語のコンテクストから言えば、①神の恩寵を受けたものが悪魔に勝つという単純な図式（他の楽師伝説に多い図式）ではない。②最後には、物語はクリングゾールの勝利、あるいは職匠歌人であり霊能者・魔術師であり悪魔使いであるクリングゾールの、歌人への嘲笑で終わる。つまり、①や②をあわせると、勸善懲悪を越えた歌人への深い批判の表出も表されているかのような深読みもできはしまいか。

とすると、歌人への視線とは何であろうか。ヴォルフラム個人の伝記上の問題なのか、歌人（ミンネジンガー）とよばれたものども全般への視線なのか？そうであったら、いつの時代の

コンテクストなのであろうか。

なかでも解く鍵として示されているかのように見える、他の学識なく神の言葉のみ通じている「無学」という表現は、果たして自由七学科の教養が学芸の心得であり、歌人は単なる実践者であり、愛の歌(ミンネリート)は一段以上も低く見られた芸であることの裏返しなのだろうか。そこには「音楽＝実践」観から近代の「音楽＝芸術」「実践音楽も芸術」観への推移が見え隠れしないか。実在ミンネの歌人の実態との比較をする上で解決される問題とも言いがたいが、これは③宮廷における歌人の地位と魔術師(あるいは芸人楽師)の地位の違いの問題とも関連付けられよう。現実と伝えられた姿(イメージ)そして、後世によるイメージの変容あるいは創出が起因しているのは想像に難くない。いずれにしても、ヴァルトブルクの歌合戦伝説は何を伝えたかったのであろうか。単なる『パルツィファル』余話なのか。深読みは可能なのか。次節以下では、歩を進めて行きたい。

II 「歌合戦」の原典 — 中世文学としてのヴァルトブルク

1、《ヴァルトブルクの歌合戦》の原典

(1)原典(Quellen)

グリムは「ヴァルトブルクの合戦」の原典として、『マグデブルク司教および大司教年代記』(*Chronica pontificum et archiepisc. magdeburgens*)、ゲルシュテンベルク編の『ヘッセンとテューリングン年代記』(*Wigand Gerstenberg, Chronicon Hassiacum et Thuringiacum, 1498-1515 und Fortsetzung bis 1549, sehr genau abgedruckt ap. Schminke. Kassel, 1747*)、ヨハン・ローテの『テューリングン年代記』(*Johann Rothe, Chronik von Thüringen*)の3書を挙げているが、これらの史料については後述するとして、書き残された物語としての「ヴァルトブルクの歌合戦」の原典の問題に少し踏みこんでみたい*4)。

原典は13世紀中頃に由来する韻文詩に骨格をもつとする岸谷徹子・柳井尚子訳著『ワルトブルクの歌合戦 — 伝説資料とその訳注』(大学書林 1987)の詳細なテキスト研究に

よると、原典はヴァルトブルクの歌合戦を中心主題とした13世紀中頃の中高ドイツ語の論争詩〈君主賛歌 *Das Fürstenlob*〉と〈なぞなぞ *Das Rätsel*〉で、一部〈王の姫たちのなぞ *Das Rätsel von den Königstöchtern*〉と〈笛吹きたちのなぞ *Das Rätsel von den Pfeifern*〉も加わったものとしている。

この原典のエディションには、ジムロック版 (Karl Simrock(Hrsg., geordnet, übersetzt und erläutert von), *Der Wartburgkrieg*, Stuttgart 1858)、フィッシャー版 (Walter Fischer(Hrsg. von), *Der Wartburgkrieg*, Eisenach 1935)、ロンペルマン版 (Tom Albert Ropmelman(Kritisch Hrsg. von), *Der Wartburgkrieg*, Paris 1939)、ヴァッヒンガー版 (Burghart Wachinger, *Sängerkrieg. Untersuchungen zur Spruchdichtung des 13. Jahrhunderts*, München 1973)などがあり、岸谷・柳井の訳は、関連する写本すべてを比較検討し異同も詳述した決定版であるロンペルマン版に依拠する。

(2)写本 (Manuscript)

原典を伝える資料として、宮廷歌人(ミンネジンガー)による中世ドイツ語による歌謡を収めた以下の写本があり、歌合戦あるいは歌合戦に登場する歌人たちの作品が伝えられている*5)。

写本 C:《マネッセ歌謡写本(大ハイデルベルク歌謡写本) *Manessische Liederhandschrift*(*Grosse Heidelberger Liederhandschrift*)》、ハイデルベルク大学図書館蔵 Pal.germ.848号写本(14世紀初頭チューリッヒで成立)。数多くのミニアチュール付き。Miniature:ハンガリアのクリングゾール *Klingsor von Ungerlant* (*Klinsore von vngerlant*)(Nr.65):各詩節にその一人称に担い手の名前が見出しとして挙がる論争詩。他に歌合戦の登場歌人では、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ *Herr Walther von der Vogelweide*(Nr.42)、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ *Herr Wolfram von Eschenbach*(Nr.44)、ラインマル・フォン・ツヴェーター

Herr Reinmar von Zweter(Nr.97)らを含む。

写本 J : 《イエーナ歌謡写本 Jenaer Liederhandschrift》イエーナ大学図書館蔵 E1.f.101号写本(14世紀中頃)テューリングン方伯マイセン辺境伯フリードリヒ(1324-49)のために制作(Holz説)。最後の部分は〈ヴァルトブルク歌合戦〉。91の旋律と数多くの旋律のない詩。タンホイザー、ハインリヒ・フォン・オフターディンゲンの旋律含む。

写本 K : 《コルマール歌謡写本 Kolmar Liederhandschrift》ミュンヘン、バイエルン国立図書館蔵 Cgm 4997号写本(現存する写本は15世紀中頃マインツでネストラー・フォン・シュパイエルによって制作、あるいはヴォルムスで成立、1546年にイェルク・ヴィックラムが購入し、これがコルマールのマイスタージンガー兄弟団の設立の礎に)。トーン Ton(詩形・旋律)によって分類。900以上の詩(うち105は旋律付き)。ラインマル・フォン・ツヴェーター(3曲)、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ(2曲)、タンホイザー(2曲)、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ(2曲)、ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン、クリングゾールの旋律含む。オフターディンゲンの〈君主の調べ(In dem gekaufte od' in dem furste ton Heinrichs offtertungen)[オフターディンゲンの旋律]〉(1239年以降成立)は〈君主賛歌〉の原型で、後にマイスタージンガーによって「君主の調べ」(脚韻 ababcdcdefefghgh)のトーン(詩形)とされ、〈クリングゾールの黒い調べ(In clingsoers swarte ton)〉(1235-39年頃成立)も〈なぞなぞ〉の原型で、「黒い調べ」(脚韻 aabccbdeed)のトーン(詩形)とされた。

写本 L : 《ローエングリン写本 Lohengrinhandschrift A》、ハイデルベルク図書館蔵(14世紀前半成立)。「黒い調べ」による767詩節(76700行)の長編論争詩(叙事詩)。冒頭数十節が〈なぞなぞ〉(3節から21節まで)とロンペルマンの追加(22から36節)と重複している。

2, ミンネザンクとしての歌合戦

(1) マネッセ写本 (Codex Manesse) の「ヴァルトブルクの歌合戦」

以上に挙げた歌合戦および宮廷歌人を伝える最大かつ重要なものは《マネッセ歌謡写本 (Die Manessische Liederhandschrift)》(以下、マネッセ写本)である。《マネッセ写本》は、今日ハイデルベルク大学図書館に所収されている《Cod. Pal[atinus] Germ[anicus] 848号写本》で、《大ハイデルベルク歌謡写本 (Die große Heidelberger Liederhandschrift)》とも呼ばれる。マネッセの名の由来は1310-30年にかけてチューリッヒの門閥リューディガー・マネッセの立案により編纂成立したことによる。ミンネジンガーの歌謡(ミンネザンク)写本中、最大の426葉からなり、うち138には、宮廷における自らの理想像を描いたとされる歌人の彩色肖像が挿図に描かれている*6)。

ヴァルトブルクの歌合戦は、〈ウンガーラント(ハンガリー)のクリングゾール (Klinsor[Klingesor] von Ungerlant)〉(Nr.65; Pal.Germ.848, fol.219v)の名のもとに、歌合戦の登場人物の肖像図とともにさまざまな所から寄せ集められた論争詩として収録されている。その挿図では、上半分の玉座の右にテューリングン方伯ヘルマン(Landgraf herman von Türingen)、左にテューリングン方伯婦人ゾフィー(Sofi Landgravin von Türingen)、下半分に7人の歌人が「歌人たち戦い(Die Kriegen mit Sanger)」として個々を特定はできないが描かれている。「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ殿、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ殿、老ラインマル殿、忠実なる書記、ハインリヒ・フォン・オプターディングン、ハンガリアのクリングゾール殿(H[er] Walth[er] von d[er] Vogilweide, H[er] Wolfran von Eschilbach, H[er].Reiman der Alte, der tugenthafte schriber, Heinrich vo[n] Oftertinge[n], un[d] Klingesor von Ungerlant)」の6人しか記されていない。画像中央、冠を被った歌人がクリングゾールと写本図像を研究したヴァルター(Ingo F Walther)は特定している。ヴァルター(Nr.62, fol.124r)、ヴォルフラム(Nr.64, fol.149v)、グリム版では「ハインリヒ・シュライバー」と記された「忠実なる書記」(Nr.86,

fol.305r)はマネッセ写本に別項が立てられており、ラインマル・デア・アルテとして歌合戦の挿図に書かれているラインマルはマネッセ写本でも登場するラインマル・デア・アルテ(Nr.34, fol.98r)ではなくて、ラインマル・フォン・ツヴィーター(Nr.97, fol.323r)である。しかしオフターディンゲンは別項が立てられておらず、タンホイザーは含まれること(Nr.79, fol.264r)からヴァーグナーが援用したようにオフターディンゲンとタンホイザーを同一視する説の根拠となった)、さらにビーテロルフは歌合戦の挿図にもマネッセ写本中にも記されていない。【図版 1-5 参照】

【図 1】Klinsor[Klingesor] von Ungerlant と欄外に書かれた『マネッセ写本』中のヴァルトブルグの歌合戦を描いたとされる挿図(ハイデルベルク大学図書館 Cod. Pal[atinus] Germ[anicus] 848号写本, fol.219v)



【図 2】『マネッセ写本』中のヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデを描いた挿図（ハイデルベルク大学図書館 Cod. Pal[atinus] Germ[anicus] 848 号写本, fol.124r)



【図 3】『マネッセ写本』中のヴォルフラム・フォン・エッセンバッハを描いた挿図（ハイデルベルク大学図書館 Cod. Pal[atinus] Germ[anicus] 848 号写本, fol.149v）



【図 4】『マネッセ写本』中のラインマル・フォン・ツヴィーターを描いた挿図（ハイデルベルク大学図書館 Cod. Pal[atinus] Germ[anicus] 848 号写本, fol.323r）



【図 5】『マネッセ写本』中のタンホイザーを描いた挿図（ハイデルベルク大学図書館 Cod. Pal[atinus] Germ[anicus] 848 号写本，fol.264r）



(2) 君主賛歌 *Das Fürstenlob* とくになぞなぞ *Das Rätsel*

グリム版の構図と、歌合戦の原点とされる〈君主賛歌〉、〈くになぞなぞ〉は、マネッセ写本中のヴァルトブルクの歌合戦、すなわち「ハンガリーのクリングゾール」の本文にも記されている。

ここでは前掲の岸谷徹子・柳井尚子訳著『ワルトブルクの歌合戦－伝説資料とその訳注』のテキストを、最新のマネッセ写本のエディションであるプファッフ版(1995)*7)を参照しながら、賛歌として「歌われた」ヴァルトブルクの歌合戦を見ていく。

〈君主賛歌〉:グリム伝説の前半(1)歌合戦:オフターディングンの敗北

(a)現場 なし

(b)登場

【第1節】ハインリヒ・フォン・オフターディングン「今ここで最初の歌を／オフターディングンのハインリヒがテューリングンの気高い君主の調べで歌う *Daz êrste singen hie nu tout/Heinrîch von Ofterdingen in des edeln vürsten dôn/von Düringenlant,*」;「オーストリア公の徳にかけて彼(マイスター:即ちハインリヒのこと)は闘士の義務を負わんとしている *des vürsten tugent ûz Ôsterrîch, dâ wil er pflihten an,*」(10行)

【第2節】ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ「さてここでうち合いが始まる。／私はヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデと申す者だ。 *Nu hebent sich die schirmeslege./Walter von der Vogelweide, sô bin ich genant.*」;「ドイツの風習に従って／明日にも刑吏は我らのうちの一人のために／処刑の綱を持って来るがよい。 *in diutscher ger/wide unde seil/ schaffe unser einem der hâher morne her.*」(14-16)

ここでは、オフターディングン対フォーゲルヴァイデの図式になっている。

【第3節】書記 [*Der tugenthafte Schrîber*]「ヴァルター殿はかの者に今日一日の猶予を与える *Her Walther lât in*

Tâlanç vrî,」

この「忠実なる書記」は、一般の書記職 (scriptor virtuosus) のものを指すのではなく、歌人ハインリヒ・シュライバーと解され、グリムにも受け継がれる。書記の役割は12節以降ビーテロルフが代わる。

【第4節】ハインリヒ・フォン・オプターディングン「さて審判はどこにいる。試合の時が来た。Wâ nu griezward! kampf ist komen!」; 「ツヴェーターのラインマルよ、私にはおまえが必要だから／誠実のならわしによって耳を借し給え。／エッシェンバッハの賢者にはもう一人の審判になっていただく Reimâr von Zweter, sît ich dîn bedarf, / hoer zuo nâch triuwen site. / von Eschenbach der wîse sol der ander kieser wesen,」(7-9)

ラインマルとヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハを審判役に要望。12節ではエッシェンバッハは第一のマイスターとして扱われている。

(c) 歌合戦の勝負

【第5節】ハインリヒ・フォン・オプターディングン「諸君、ちょっと聞く気があるなら、／オーストリア公の徳を諸君にお話しよう。」

【第6節】書記「7人の諸侯はローマ国王を／選定する権限を持っている。／彼らとてかの気高き君テューリングンのヘルマンの／望む人でなければ選ばない。」

前節でオーストリア公を讃えたのに対して、主催者の城主ヘルマン方伯の権勢を誇示している。

【第7節】ハインリヒ・フォン・オプターディングン「書記殿、あなたもあなたの手も」; 「私のマイスターと呼べるのは／ツヴェーターのラインマルと／…あのエッシェンバッハのヴォルフラム殿だ。」(3-5)

【第8節】書記「あなたの従僕に私の巻き毛を…」; 「アイゼナハのシュテンペル(ステムペル)は／我ら2人の頭上にその幅の広い剣を抜いて立つべきである、」(11-12)

刑吏シュテンペルによる断首刑を賭ける文字通り命懸けの歌合戦とあいなる。

【第9節】ハインリヒ・フォン・オプターディングン「足のつま先か

ら頭 のてっぺんまで」

【第 10 節】書記「オフターディンゲンが婦人たちの着物について語るところによれば」

【第 11 節】ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン「テューリングゲンの殿は若い時から」

【第 12 節】ビーテロルフ「我輩ビーテロルフが今や登場せねばなるまい、」；「ラインマル殿、そして諸君一同のマイスターであるエッシェンバッハ殿、」(12)：

ヴォルフラムを諸君一同のマイスターと第一の歌人として持ち上げることは、後日談である〈なぞなぞ〉でクリングゾールと対戦する伏線なのか、〈君主讃歌〉成立時の評価の表れなのか定かでない。なお、この後にプファッフ版マネッセ写本には第 13 詩節が挿入されている*8)。

【第 13 節 (プファッフ版では第 14 節、以下同様)】ビーテロルフ「シュテンペルよ、もっと近くへ歩み寄れ」

【第 14 節 (15)】ビーテロルフ「大胆さに加えて名誉を重んじる心があり、」

【第 15 節 (16)】ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン「私はテューリングゲン殿の助太刀として／そこのブランデンブルク殿とヘンネンベルク殿を加えることを許そう。」

【第 16 節 (17)】ラインマル・フォン・ツヴェーター「君主の奥方とおつきの婦人方が」；「オフターディンゲンのハインリヒよ、ラインマルがおまえの敵になってやろう」(6)：審判役ラインマルの参戦

【第 17 節 (18)】ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン「用心しろ、ツヴェーターのラインマルよ、」

【第 18 節 (19)】ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ「言え、オフターディンゲンのハインリヒよ、」；「もしおまえは悪霊にとりつかれているなら、／私エッシェンバッハのヴォルフラムは僧侶のやり方に従って／おまえを破門しなければならない。」(5-8)

審判役としてのヴォルフラムが語る「僧侶のやり方」は、グリムにいたる彼の人物造形にも影響を与えているのであろうか。

【第 19 節 (20)】ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン「ようこそテラメール殿。」；「ヴァルター殿、ラインマル、書記、ビーテロルフの一同は／あひるの妄想を抱いているというものだ、」

(13-14)

ヴォルフラムは審判役で、ラインマルが途中から対ハインリヒに討って出る。

【第 20 節 (21)】ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ
「私ヴァルターは歌を嘆かずにはいられない。」

【第 21 節 (22)】ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ
「一人の王と二人の有力な領主が選出されている、」
ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン「オーストリアのわが主君こそ！」(11) *9)

【第 22 節 (23)】ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ
「私が教えてあげよう、夜明けの方が／太陽や月や星の光よりももっと称賛に値するのだ」；「我々にその財を進んで／喜捨し給う御方、それはテューリングンのヘルマンだ。」(15-16)

(d)再審要求

(e)探索へ*10)

【第 23 節 (24)】ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン「オプターディンゲンのハインリヒは、テューリングンの国で／不平等のさいころが自分の前に持ち出されたといって嘆く。」；「ヴァルターが奸計を用いて勝利を奪うのは／誠実なやり方ではない。」(3-4)；「オーストリア公がいかに太陽にたとえられようとも、／誰か他の君主に劣るといふぐらいなら、／ハンガリーのクリングゾールよ、／私はむしろおまえを待とう、たとえおまえが海のかなたにいようとも。」(5-9)；「私はハンガリーのクリングゾールに／どうしてもここに来てもらいたい、」(14-15)

グリムの「巧妙な言葉の罠」とは、23 節のさいころでの勝負の決着のことを示していると思われる。

【第 24 節 (25)】「4人のマイスターは彼の死を望んだ。」
「シュテンペルはその準備をすべきだということで幾度もその名が呼ばれた。」(2)；「君主の奥方[方伯夫人ゾフィア]は言った、かつて私が救いの手を差しのべたことのある人は、」(3) *11)

論争詩では方伯夫人の外套の下に隠れることはなく、方伯夫人の懇願とクリングゾール搜索のための執行猶予が語られる。

これ以降、グリム版の(f)探索の旅、(g)出会い、(h)クリング

ゾールの魔法行、(i)ハインリヒ帰還の報せ、(j)予言、(k)方伯の宴会は、次の〈なぞなぞ〉においても欠落している。マネッセ写本での〈なぞなぞ〉への連結は、Pfaff(原典)の第25節末尾の以下の詩節となっている。

「ここにクリングゾール来たりて歌いエッシェンバッハと相対す。クリングゾールから手始めに、かくしてうたいし歌、後にここに書き留めおく。(hie ist Clinsor komen und singet er und der/ von eschenbach wider einander./ Und vahet das Clinsor an. Und/ singet disu dru lieder diu hie/ nach geschriben stant.)」

〈なぞなぞ〉

グリム伝説の後半(2)(3):歌合戦の後日談はクリングゾール探索とヴォルフラムとの再試合(なぞなぞ)の論争詩である。

(1)クリングゾールとヴォルフラムの歌合戦:論争詩〈なぞなぞ Das Rätsel〉、さらに〈王の姫たちのなぞ Das Rätsel von den Königstöchtern〉、〈笛吹きたちのなぞ Das Rätsel von den Pfeifern〉の付加

〈なぞなぞ Das Rätsel〉

【第1節】「川に近い平野にチューリングンの高貴な殿のテントが立てられてたとき、」

【第2節】「私は縄を結んでこぶを作った。」

【第3節(Pfaff 26)】クリングゾール(klingsor)「父親が子供に呼びかけた」

【第4節(27)】クリングゾール「父親が怒ったのも無理からぬことだ」

【第5節(28)】クリングゾール「ハンガリアのクリングゾールが私に語った」

【第6節】クリングゾール「さあこの結び目を解いてくれる人がいるなら、」

【第7節(29)】ヴォルフラム(von eschenbach)「クリングゾールよ、その結び目を私が解こう」*12)

【第8節(32)】ヴォルフラム(Eschenbach)「さあ、聞け、私に

見る目があるかどうか。」

【第 9 節 (31)】ヴォルフラム(Eschenbach) 「私の頭に狂いがないなら、」*13)

【マネッセ写本のみの詩節(39—44)】:39—40 節 ヴァルター(Walther [von der Vogelweide])、41-42 節 ヴォルフラム(wolfram)、43-44 節 クリングゾール(klingsor)

【第 10 節 (47)】 クリングゾール 「そのような知恵は天使が見つけてくれるもの」

【第 11 節 (90)】 ヴォルフラム(wolfram) 「勝利は神の手中にある」

【第 12 節 (45)】 クリングゾール 「さあマイスターよ、気を悪くしないで私に言ってください。」

【第 13 節 (46)】ヴォルフラム 「もし私にお前の野生の言葉を飼い馴らすことができないとすれば、」:

13 節で謎を解き、勝利する。グリムでは略された〈なぞなぞ〉の形で2人の歌合戦が繰り広げられる。また、グリムにおけるクリングゾールの呼び出した霊(悪魔)とヴォルフラムの歌合戦は〈なぞなぞ〉にはない。

(m)学識判定

【第 14 節 (48)】クリングゾール「さて、ヴォルフラムよ、おまえを無学者とみなすような人は／頭が悪いのだ。／おまえは占星術に通じている。」(1-3)「悪魔ナジオンが今夜のうちにも、おまえがたった一人で行って／それを探索してくれるだろう。」(5-6)

【第 15 節 (49)】ヴォルフラム「おまえやおまえの悪魔たちがどんな技を心得ていようとも、」

【第 16 節 (50)】クリングゾール「おまえはウラーニアスの名を挙げたが、」

(n)悪魔との再戦

【第 17 節 (51)】ナジオン「さあ、おまえに名人の学識があるなら、私に试试看、」*14)

【第 18 節】ヴォルフラム「私には星に関する知識はない。」*15)

【第 19 節】ナジオン「何でお前は私がわざわざここへ連れてこられることを望んだのか、」／「おまえはずぶの素人だ、と私は

壁に書いてやる。」(7) *16)

【第 20 節 (54)】ヴォルフラム(wolfram) 「呼び寄せられたお前の苦勞など私の知ったことではない」

【第 21 節 (55)】ヴォルフラム(eschilbach) 「ヴォルフラムは胸の前で十字を切った。」

(o)悪魔の痕 なし

(p)後日談 なし

第 21 節 (55)以降はプファッフ版 マネッセ写本に、56—89、91 節の論争詩が残されている*17)。

また、両者の論争は《王の姫たちのなぞ Das Rätsel von den Königstöchtern》としても残されている。

【第 1 節 (プファッフ版 マネッセ写本では第 33 節、以下同様)】クリングゾール(klingsor) 「一人の王様がいてかわいい二人の姫君があった、」

【第 2 節 (34)】クリングゾール 「二人の男のうち的一方は」

【第 3 節 (35)】クリングゾール 「もう一人の女も夫から大きな苦しみを受けた」

【第 4 節 (36)】ヴォルフラム(von Eschenbach) 「もし私に真鍮をもって受けとめよというのなら、」

【第 5 節 (37)】ヴォルフラム(eschenbach) 「さて、男もそして祝福されている女も」

【第 6 節 (38)】ヴォルフラム(eschenbach) 「自分の配偶者を泉のわき出る所へ連れて行った男というのは、」

3、「歌合戦」伝説

(1) 歌合戦伝説の史料

論争詩ではなく、物語として、14 世紀以降は以下に挙げたいくつかの伝記文献(Vita)に、歌合戦伝説は著されている。伝説原典といえるべきこれらの伝記群は、14 世紀のキリスト教布教のため聖職者によって書かれてきたが、十字軍で揺らぐローマ教会の権威復興と、そのため「聖人・聖女」を生み出すメカニズムの一端に、歌合戦伝説はどのように関わってきたのだろうか。

① 『ラテン語原典よりザールフェルトのフリードリッヒ・ケーデッツによって訳された、聖エリーザベトの夫君、テューリンゲン

方伯聖ルードヴィヒの生涯 *Das Leben des heiligen Ludwig, Landgraf in Thüringen, Gemahls der heiligen Elisabeth. Nach der lateinischen Urschrift übersezt von Friedrich Ködiz von Salfeld.*』(Hrsg.v.Heinrich Rückert, Leipzig 1851, S.9-13. 以下、『聖ルードヴィヒ伝』)。これは14世紀にドイツ語に翻訳。おそらくラテン語原典(Q)があったと思われるが現存せず。

①' 『ラインハルトブルン年代記 *Cronica Reinhardnbrunnensis*』(in: *Monumenta Germanica Historica. Scriptorum Bd.XXX-1*, Hrsg.v.Oswald Holder-Egger, Hannover 1908, S.571-574)は、ラテン語、15世紀に編纂。『聖ルードヴィヒ伝』の部分は①と同じラテン語原典による。

② アポルダのディートリヒ『聖エリーザベト伝』*Dietrich von Apolda, Vita S.Elisabeth(1289-97年)*は、クリングゾールの聖エリーザベト誕生の予言の部分を収録。

③ ヨハネス・ローテ『聖エリーザベトの生涯 "Hie hebet sich an daß lebin Sent Elizabeth"』*Johannes Rothe, Das Leben der heiligen Elisabeth (Kapitel.III-VII: V.215-698)* (In: *Der Wartburgkrieg*, Hrsg.v.Walther Fischer, Eisenach 1935, S.111-127. 以下、『ローテの聖エリーザベト伝』)。これはドイツ語韻文で書かれ、ローテはテューリンゲンの書記官(1434年没)である。①や①'よりも記述は長い。クリングゾールの聖エリーザベト誕生の予言の部分は一致。「ヴァルトブルクの合戦」という表現の初出がみられる。

④ グリムの拠った15世紀以降の原典は以下。
Chronica pontificum et archiepisc. magdeburgens. (『マグデブルク司教および大司教年代記』)。
Wigand Gerstenberg, Chronicon Hassiacum et Thuringiacum, 1498-1515 und Fortsetzung bis 1549, sehr genau abgedruckt ap.Schminke. Kassel, 1747 (『ヘッセンとテューリンゲン年代記』)。
Johann Rothe, Chronik von Thüringen. (『テューリンゲン年代記』)、ここにはローテの『聖エリーザベト伝』を含む。

(2) 論争詩と伝説

以下では、19世紀のグリムの「伝説」形成に至るまでの直接の資料となった伝説原典の二書、15世紀の『ラテン語原典よりザールフェルトのフリードリヒ・ケーデッツによって訳された、聖エリーザベトの夫君、テューリングン方伯聖ルードヴィヒの生涯』(『聖ルードヴィヒ伝』)を、欠落部分をヨハネス・ローテ『聖エリーザベトの生涯』(『ローテの聖エリーザベト伝』)で補いながらグリムの構図にそって対照したうえで、伝記に先だって成立していた原典である論争詩「(a)〈君主賛歌〉と〈なぞなぞ〉」がどのような資料変遷を経て伝記「(b)『聖ルードヴィヒ伝』と『ローテの聖エリーザベト伝』」に至り、グリムが原典とした15世紀以降のテキストに継承されていったかを検討していきたい。

(i) 『聖ルードヴィヒ伝』と『ローテの聖エリーザベト伝』の比較(訳は岸谷・柳井前掲書による。一部筆者改)

グリムの構図	『聖ルードヴィヒ伝』	『ローテの聖エリーザベト伝』による補完箇所
(a) 現場	I. 5. ヘルマン方伯の館で名人の位 [meisterschaft] を競う 6 人の歌人 [sprechern] について。彼らに加えてハンガリーの名人 クリングゾール [meister Clingesor] もアイゼナハに来た。 キリスト生誕後 1207 年、ヘルマン方伯の館に 6 人の家臣がいた、彼らは詩作において熟達し、つねに宮廷風の歌の技を競っていた。	第 3 章 そのころヴァルトブルクにいた 6 人の歌の名人 [meistersengern] について 「キリスト生誕後 1207 年と記される頃、アイゼナハの町のほど近く、テューリングンのヴァルトブルクに...」(215-218)
(b) 登場人物	その一人はハインリヒという名の書記、他の一人はヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ、第三にはラインハルト・フォン・ツヴェチェン、第四にはヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ。第五にはピーテロルフ、第六にはハインリヒ・フォン・オプターディンゲン。	「うち四人は領主の館に属していたが、いちばん身分の高いものは書記ハインリヒ [Heinrich Schriber] といい、あらゆる宮廷風文化の真の鼓舞者だった。もう一人はフォーゲルヴァイデのヴァルターといい、この二人は共に騎士 [rittere] だった。また一人はツヴェチェンのラインハルトといって、騎士の身分であった。エッシェンバッハのヴォルフラムも同様で、宮廷風の詩を多く作った。アイゼナハの市民 [burger] 二人も歌を作る心得があり、その一人は歌うことの上質なピーテロルフ、他の一人はオプターディンゲンのハインリヒ。かれら六人は、詩作の名人だった [meister zu tichten]。」「(222-235) 「それらの歌を今でもよく知っている人がおり、ヴァルトブルクの合戦

(c) 歌合戦の勝負	この人は一人で他のすべてを相手に戦いをいどみ、ヘルマン方伯よりもオーストリア公を高く称賛し、オーストリア公を彼の詩の中で輝く太陽にたとえた。それに対して他の五人はヘルマン方伯を賛美し彼を明るい夜明けにたとえた。彼らは共々真剣になり、負けた方は死刑にされるべきだと取り決めた。そこで刑吏が手に綱をもってやって来た。彼らの敵意は増大し、五人は偽りの奸計をもって、名人の位を得るにしろ失うにしろ、さいころで勝負しようとして計画した。そして五人は刑吏のいる前で、偽りのさいころでハインリヒ・フォン・オプターディンゲンから名人の位を奪った。	[krig von Wartperg]と呼んでいる。」(247-248) 「彼らは聖書のあらゆる箇所から題材を得て宮廷風のなぞなぞ[retsai]も歌ったが、でも学識は全くなかった。」(249-251) 「そのなぞなぞをもっともよく解き得た者が、そこに居合わせる者の中で最良の人という栄誉を勝ち得たのだった。」(253-256) 「かれらは、この市民風情[der untuchtuge burgere]がつねづね自分たちに敵対して歌うことで、彼をひどく憎み、なんとか彼の生命をうばうことはできぬものかと考えるようになった。」(267-272)
(d) 再審査要求	ハインリヒは事態を見てとるや、方伯夫人ゾフィアのマントの下に救いを求めた。その時はクリングゾール名人の名を持ち出した。五人もそれに応じた。	「ハインリヒが方伯夫人のところまで逃げてきて、婦人のマントの下にもぐりこんだとき、それをひどく笑ってからかう者も何人かいた。」(309-312)
(e) 探索へ	クリングゾールがどちらの側に軍配をあげようとも負けた側を綱で裁くということになった。クリングゾールを迎えに行くために一年の猶予が与えられた。	
(f) 探索の旅	そこでハインリヒ・フォン・オプターディンゲンはオーストリアへ向かい、彼がかつてその人の賛美の歌を歌ったオーストリア公に丁寧に迎えられ、贈り物をたっぷりもらった。とくにオーストリア公は彼にクリングゾールあての推薦状を与えた。クリングゾールはその頃ハンガリーのジーベンピュルゲンに居を構え、毎年三千マルクの報酬を得て豊かに暮らしていた。彼はまた俊敏な哲学者で世俗的な技にも通曉した学者であった。特に彼は天文学と魔術に通曉していた。この人の所へハインリヒ・フォン・オプターディンゲンはオーストリア公の推薦状をもってやって来て、来訪のわけを説明した。	第4章 ハンガリーのクリングゾールを迎えにいったこと 「彼ほど七自由科[siben frien kunsten]に通曉した者はどこにもいなかったのだから、彼はハンガリーの国で国王にきわめて厚く遇せられるようになった。彼はクリングゾール名人[meister Clingsor]と呼ばれ、国王から毎月黄金一マルクの禄を受けていた。彼は途方もなく賢い男で、占星術[gesternis]の心得があり、未来のことを予言したり、国内の動静を言いあてたりした。魔法[swarzen kunst]を使う能力もあり、それによって、国王や廷臣やその他の人々の寵を得ていた。彼は聖書の解釈をよくなし得る男であった。」(330-344)
(g) 出合い	クリングゾールは彼に色好い返事をしたが、判決を下すべき日の前の板になるまでぐずぐずとヴァルトブルクに行くのを引き延ばした。そのためオプターディンゲンは非常に不安になった。彼ら二人は魔術によって夜の間にハンガリーからアイゼナハへ急行し、ヘレグレーフェという名の市民の家に来た。こうしてクリングゾール名人は歌人たちを裁くためにテューリングゲンにやって来たのであった。	
(i) ハイン	→(i)ハインリヒの帰還の報せの欠	第5章 クリングゾールが一夜のう

リヒの帰還の報せ	落	<p>ちにハンガリーのジーベンビュルゲンからアイゼナハに連れて来られたこと</p> <p>「オフターディンゲンのハインリヒが名人を連れてやって来ている—しかもそれは昨夜のことだ—という知らせは、ただちにヴァルトブルクにもたらされた。騎士たちは城から出て来て、名人を懇懃に出迎えた。正真正銘見たとおりの話だが、名人にはたいそうな贈物もなされたのであった。人々はかれら二人に、昨日の夜あるいは晩は、どこにおられたのですかと尋ねた。そこでオフターディンゲンのハインリヒは言った。「眠りについたのはジーベンビュルゲンだったのですが、今朝、ミサの時刻にはここに来ているのです。どうしてそういうことになったのか、私には皆目わかりません。」」(491-504)</p>
(j) 予言	<p>I.6. クリングゾール名人がルードヴィヒ方伯と聖エリーザベトの婚約を予言したことについて</p> <p>こうしてクリングゾール名人はアイゼナハに来て方伯の前に参上することになった。</p> <p>彼はある晩宿の前に座り、天の星を観察していた。その時居合わせた人々は、何か珍しい不思議なことを天の星に見つけたかどうかと彼に尋ねた。彼は次のように答えた、「諸君、ハンガリー王に一人の姫君が今晚生まれる。その姫君はエリーザベトと命名され聖別されるであろう。また姫君はヘルマン方伯の若君の妃となり、その称賛されるべき聖なる生命によって、全世界、特にこの国の人々が喜びと希望を得ることになるであろう。」</p> <p>さて、主なる神は自分の聖なる誕生の神秘を異教の予言者パラームによって予言させ給うたが、今度は、神の選ばれたるしもべである聖エリーザベトの誕生と名前をクリングゾールが予言することを望み給うたのであった。</p> <p>当時アンドレアス王がハンガリーを統治していた。その王妃はケルンテン公の娘ゲルトルートであった。この妃は予言どおり一人の姫君を生んだ。その姫君は王の一族のほまれであった。彼女はキリスト誕生後1207年に洗礼を受けエリーザベトと命名された。その後まもなく神の思召しにより選ばれたる聖エリーザベトは、ヘルマン方伯の長男ルードヴィヒと婚約したのである。それはこの高貴な乙女がまだ乳飲み子の時であった。</p>	
(k) 方伯	方伯の宴会の欠落	第6章 クリングゾールが聖エリー

の宴会		<p>ザベトの誕生と方伯の息子との婚約を予言したこと</p> <p>同宿の方伯の家臣から予言を聞いた方伯ヘルマンは、クリングゾールをヴァルトブルク城に宴会に招く。そこで方伯は彼に政治情勢について聞く。</p> <p>「かれらはこの話（クリングゾールの予言）を聞いた翌朝、ヴァルトブルクに向かったが、ちょうどヘルマン方伯は身仕度をととのえてミサを聞きに行こうとするところであった。かれらは方伯を妨げたくなかったので、方伯とともにミサに出かけた。ミサが終わったあとでかれらは、クリングゾール名人から聞いたあの言葉をすべて方伯に語った。かれらが名人とともに庭に座っていたときに聞いたあの話である。名人は真夜中近くまで熱心に星を観察したあと、将来これこれしかじかのことが起こるだろうと、かれらに真実を話してくれたのだ、と。これを聞いて方伯はひどく驚いたが、城内の家臣一同も同様であった。将来このようなことが起こり、このような神のお恵みを授かるであろうという話を聞いた人々はみな、それゆえに全能の神をたたえた。方伯は馬にまたがり、家臣一同を従えて、クリングゾール名人を出迎えに行った。僧侶たちは、この名人がまるで大僧正でもあるかのように、うやうやしくもてなした。名人のために、十分の人数の従者を連れてこなければならなかった。</p> <p>方伯は名人と歓談した。そして、ヴァルトブルクにおいでになって、城をごらんください、食事をともにしてください、このことをお忘れになりませんように、と名人に請うた。喜んでそういたしましたしようと、名人は答えた。翌朝早くクリングゾール名人はヴァルトブルクにおもむいた。方伯は、彼を温かく迎え入れ、たくさんのごちそうで敬意を表した。食事をしたあとも、しばらくの間は席を立たず、名人は方伯と語り合った。ハンガリーの情勢はどうなっているか、王は何をするおつもりか、異教徒たちと和平を結ばれたのか、それともまだ戦争をしておられるのかどうか、といろいろと思いをめぐらした。方伯の尋ねたことに、名人は残りなく答えた。彼はいとまごいをして、食堂を出、騎士の館に入ってしまった。」</p> <p>(543-594)</p>
(1)2人の歌合戦	I.7.クリングゾール名人がエッシェンバッハのヴォルフラムと技を競い、その後ハンガリーに帰ったことについて	第7章 クリングゾール名人がオプターディンゲンのハインリヒをその歌の件から無罪放免にしたこと

	<p>その同じ頃にクリングゾール名人はヴァルトブルクの館でヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハとの歌合戦を開始した。クリングゾール名人は彼を打ち負かすことができなかつたので、英知と技能の点でヴォルフラムにまさっている他の名人を代わりに連れて来ることを約束した。そこでクリングゾールに呼び出された悪魔は人間の姿で城門をたたいた。方伯は彼を中に入れるようにと命じ、ヴォルフラムと論争することを許した。最初に語ったのは悪魔であった。彼は天地開闢からキリスト生誕までに起こったすべての出来事を語った。それに対してヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハは、永遠の言葉である神が我々人類の救済のために人の姿をおとりになったという神の慈愛について語り始めた。特に聖なるミサの秘蹟に説き及び、聖なるミサの一つ一つを余すことなく解釈した。そしてついに、永遠の父の叡知であるキリストが自ら語り給うた崇高な力強い言葉に説き及び、その言葉と共にまたパンと葡萄酒は肉と血に変化給うたと語った。またかつて一度キリストは全世界の罪をあがなうために、天なる父に汚れなきいけにえとして自らを捧げて十字架にかけ給うたが、そのようにして各人の罪を償うために、自らを犠牲にし給うたお方の言いつくしがたい愛のしるしである日々の聖なるミサの行事について説き進めた。崇高なテーマがこの慈愛に満ちた言葉で語られるのを聞いて、悪魔は邪悪さゆえにいたたまれなくて遁走した。クリングゾール名人は、自分の技術が全然役立たないのを見た時、恥じ入ってそこから立ち去った。このようにしてクリングゾール名人はヴォルフラムに打ち負かされたのである。</p>	<p>「一方、クリングゾール名人は、ヴォルフラムがこのように巧みに語るのを聞いて、この男はよほどの学者に違いないと思ったが、ひとには言わなかつた。もしヴォルフラムが無学者ではないとすれば、その称賛はますます高まることになるからだった。」(643-648)</p>
(m) 学識判定	<p>クリングゾール名人はそれだけではおさまらず、ヴォルフラムに学識があるかどうか知るために、もう一度彼のもとにその悪魔をおもむかせた。</p>	
(n) 悪魔との再戦	<p>悪魔はある夜、ヴォルフラムがアイゼナハでゴットシャルクという名で眠っていた時にやって来た。そして彼に天体と星と7つの惑星の性質について質問をあげさせた。しかし、ヴォルフラムは全然答えなかつた。それで悪魔は大きな音をたてて、「あいつは無学者 [leie] だ、あいつは無学者だ。」と叫び、館の壁にそれを書</p>	

(o) 悪魔の痕	きつめた (o) 悪魔の痕の欠落	「その暖炉部屋には誰も入ろうとはしなかったが、誰もがその奇跡を見たがった。(まるで練り粉に指で書いたようなその筆跡を今でも示すことができただろうに)。それを見ようと思う者は、明かりをかかげなくてはならなかったが、そのことで主人はすっかり腹をたて、壁をこわしてその石をとり除かせると、水中に捨てさせて、もう誰もその石に触れることができないようにしてしまった。」(683-692)
(p) 後日談	そのことがあった時、ヘルマン方伯はクリングゾール名人にテューリングンにとどまるように懇請し、贈り物を与えようとした。しかし、クリングゾールは無学者に負けたことを恥じてとどまろうとはしなかった。それで彼は再びジーベンビュルゲンへ帰った。	

(ii)「〈君主賛歌〉と〈なぞなぞ〉」[(a)] と「『聖ルードヴィヒ伝』と『ローテの聖エリーザベト伝』」[(b)]

ローテによる脚色は別の原典を足すほどのものではないという前提のもとで、「〈君主賛歌〉と〈なぞなぞ〉」[(a)] と「『聖ルードヴィヒ伝』と『ローテの聖エリーザベト伝』」[(b)]の記述について比較してみたい。

前半の歌合戦について、論争詩(a)の中立性に比べ、伝記(b)のふたつの資料のハインリヒへの肩入れに変化が見られる。つまり1206年から1207年に話を引っ張らねばならなかった事情、そして当然クリングゾールの予言の挿入の必要が大きい原因となっている。つまり、(b)における予言の挿入は、ヴァルトブルク歌合戦が1207年へまたいで開催の必然から生じた措置であり、歌合戦と聖女誕生という2つの事件の融合のためのはめ込みの方便である。一方で、クリングゾールに限らず、ハンガリー王アンドレアスから生まれたばかりの王女エリーザベトと、ヘルマン方伯の長男ルードヴィヒの婚約の締結を求める使者が1207年にヴァルトブルクを訪れた可能性が、クリングゾール訪問に結びついているかもしれない。そしてその事実が、聖女伝説とも相重なって、後世には「使者や予言者の物語」の体をなしたのではという推測も成り立つ。

(a)のクリングゾールとヴォルフラムの論争詩の〈なぞなぞ〉に比べ、(b)における悪魔とヴォルフラムの歌合戦には、宗教的

主題の強烈さが窺える。たとえば、クリングゾール側の敗北の明記と代役の悪魔の参入などは、〈なぞなぞ〉には見られない。〈なぞなぞ〉に比しての宗教的説教臭さは、『アポルダの聖エリーザベト伝』に由来する特徴である。さらに、後半でのクリングゾールとハインリヒのアイゼナハの宿「ヘレグレーフェ」に対してヴォルフラムの宿「ゴットシャルク」というように「地獄」と「神」の隠喩で、両者の善悪の背景を語らせる多少強引に思える手法も見られる。

〈なぞなぞ〉にも顕著な占星術の学識については、悪魔と信仰の知識のみのヴォルフラムと対比させる立場として、(b)においては博学だがクリングゾールに異教的あるいは魔術師といった反宗教性をもたせることで強化させている。しかし、聖女の予言者でもあるクリングゾールを完璧に断罪するわけにもいかず、異教の予言者バラームとクリングゾールの比肩や、クリングゾール本人ではなく呼び出した悪魔に対戦させるという逃げ道も設定されている。つまり、ドメニコ会士アポルダに由来する聖女崇拜と、非キリスト教的存在としての「クリングゾール＝楽師」的なるものへの断罪の矛盾が解決せぬまま、ないまぜとなって伝説は作られた。歌人の要件とは誠実なキリスト者であろうとするこれらの構図の背景には、現実にはそうとはいえなかった歌人や楽師に対する非難めいたものが感じられまいか。楽師に限らず歌舞音曲に従事するものである宮廷歌人(吟遊詩人)も、出自が騎士や従士であっても無学であるとし、第一の歌人ヴォルフラムですら「信心」のみの有無で判断されてさえいる。年代記者であった聖職者・修道会士によるイメージ操作がそこには見られる。14世紀は騎士道文芸の時代でもあり、騎士道の理想をなんとかキリスト的倫理観に導こうとする修道会士たちの意図でもあろう。

その結果、(a)に比べて(b)では前半と後半の物語の「トーン」が異なる印象としてあらわれ、無理に結び付けられたふたつの物語の感も否めない。また論争詩においても、なぜ、〈君主賛歌〉と〈なぞなぞ〉はひとつの伝説となったのか、もどのような文脈でとらえればよいのであろう。そして、悪魔の使い手であるクリングゾールは、その学識(政治的情報量)ゆえに、方伯ヘルマンにも重用される。いずれにせよ、キリスト教的な学識の

埒外にいるクリングゾールとは何者かという疑問が増す。そして、ヴォルフラムは、後述するが代表作『パルチヴァール』においてクリングゾールを登場させているのである。

歌合戦伝説が、論争詩に登場し、年代記や聖人伝に採り上げられた13世紀から14世紀にかけては、中世ドイツ文学において騎士道を主題とした多くの作品が生み出された。なかでも、〈君主賛歌〉にて第一のマイスターと讃えられて、〈なぞなぞ〉あるいは後日談ではクリングゾールとその麾下の悪魔と対戦することになったヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』には「クリンショール Clinschor」が登場する。「クリングゾール Klingsor」の原型なのであろうか。以下で見るが、年代記や聖人伝の元になった原典があるとするならば、パルチヴァールから原典Qへの影響の上で伝説の重要な登場人物が援用された可能性もある。また、論争詩〈君主賛歌〉、〈なぞなぞ〉のパフォーマンスのあり方、これはミンネザンクのパフォーマンスでもあるが、歌人と楽師の関係も踏まえて、そのなかで様々な影響・援用関係も想定できる。たとえば、ヴァルトブルクで歌われた歌は、『イエーナ歌謡写本』(1330-40年代)、『コルマール歌謡写本』(1470年代)に旋律つきで残されている歌のひとつかもしれない。一方、聖人伝や年代記は、語られるもの・歌われるものに対して、ほんとうに読まれる「伝記」であったのだろうか。14世紀以降の「伝記」が書き残されて編纂され成立していく理由は、読まれるためであったのか、語られているものを残すためであったのか。リテラシーの問題にも関わるテーマであろう。

(3) 歌合戦写本の成立

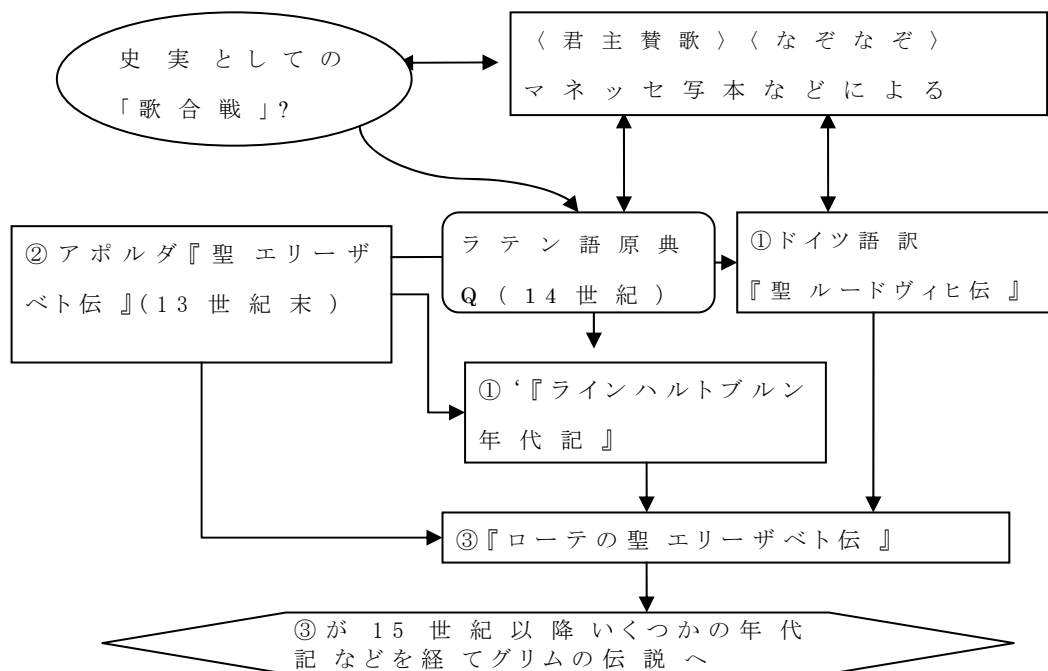
マネッセ歌謡写本などに残された論争詩と、伝記や年代記として書かれた伝説の原典を併せて、ここでは歌合戦写本として、その成立の経緯と相互関係について考えてみたい。論争詩の成立については、前掲の岸谷徹子・柳井尚子両氏によると、2つの伝説の成立仮説が提示されている。

第一仮説は、いくつかの「黒い調べ」が〈なぞなぞ〉になり、一方でマネッセ写本のミニアチュールにみられるように最初にハンガリーのクリングゾールの存在があり、これに聖エリーザベト

伝の付加がされ、〈君主賛歌〉が成立したとする説である。

第二仮説は、まず聖エリーザベト伝における学者・魔術師クリングゾールの伝説があり、その後クリングゾールを加えた〈なぞなぞ〉や〈君主賛歌〉といった一連の歌合戦物語の成立を見たという説である。

いずれにせよ、歌合戦伝説の原像については、いずれもなぜ「1207年」かという特定年号の記述の問題が鍵となる。歌合戦は聖エリーザベト誕生伝説と結びつける必要があり、論争詩では〈君主賛歌〉、〈なぞなぞ〉に挿入されていった。その形跡は『聖ルードヴィヒ伝』の節立てや『ローテの聖エリーザベト伝』の章立てといった構成に顕著に現れる。伝記原典の相互の関係に対して、仮に歌合戦という事実があったならば、原典Qに影響があったはずであり、〈君主賛歌〉、〈なぞなぞ〉は少なくとも①の『聖ルードヴィヒ伝』と相互に影響しあっていた可能性がある。【下図6参照】



【図6】 歌合戦伝説の関連

そして、グリムの「ヴァルトブルクの合戦」の直接の資料となったのは、ローテの『テューリングン年代記』中の③「聖エリーザベト伝」であるが、考えねばいけない問題点がある。極めてまともなことだが、ヴァルトブルクの歌合戦は実際にあった出来事を物語化したのか、まったくの架空の話なのかという点である。これには、クリングゾールは実在した人物かという問題も考えねばならない。次章では、実在したと思われる歌合戦の登場人物、テューリングンとヘッセンの方伯ヘルマンと方伯夫人ゾフィア、オーストリア公レオポルド、さらにはクリングゾールの予言に示された王子や王女の史伝を見ることで、歌人たちの実在性と、歌合戦の史実、伝説の生成について別の面から考察していく。

Ⅲ ヴァルトブルクの1200年代—ヴァルトブルクの歌合戦の歴史的背景

1、伝説の道具立て：聖エリーザベト伝説

(1) 歴史上の登場人物の史伝

(i) テューリングンとヘッセンの方伯ヘルマンと方伯夫人ゾフィア

興味深いことに『グリム伝説集』には歌合戦の時代の前後のテューリングン方伯家の一連の物語が記されている*18)。ヴァルトブルク歌合戦の領主ヘルマンは、伝説の年号を信ずるならば、ルドヴィンガー家のテューリングン方伯ヘルマン1世 *Hermann I. (Landgraf von Thüringen)*とされよう。ヘルマン1世は、ザクセン選帝伯位でもあった兄ルートヴィヒ3世の1190年の第3回十字軍での死後、方伯位を継承する。先立つ1182年にゾンマーエッシェンブルク家のゾフィアと最初の結婚をし、ユッタとヘドヴィヒの2人の娘が生まれる。1196年にバイエルンのゾフィアと再婚し、ヘルマン、ルートヴィヒ、ハインリヒ・ラスペ、コンラートの息子たちとイルムガルト、アグネスの娘を得た。後妻のゾフィアが歌合戦に登場する方伯夫人である。

またヘルマンは、この時代のシュタウフェン家とヴェルフェン家の抗争の渦中にあった。両家の領袖フリードリヒ1世バル

バロッサ帝とハインリヒ獅子公が1190年と1195年に亡くなって後も、抗争は息子たちのフィリップ・フォン・シュヴァーベンとオットー4世に受け継がれ、両者はドイツ王位を争った。ヘルマンはこの間に少なくとも7回も陣営を変え、1211年にバルバロッサの孫のフリードリヒ2世がドイツ王位獲得のために動く支持に回りシュタウフェン朝に帰属した。文化史では、パリを訪れたことのあるヘルマンは、当時のフランス中世文学に接し、トルバドゥールやトルヴェールの文芸をドイツに伝えミンネジッターの文芸の庇護者となったとされ、方伯の宮廷ではハインリヒ・フォン・フェデレケの『エネイーデ』やヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの『パルチヴァール』、『ヴィルハルム』などが創作されたといわれている。歌合戦の舞台ヴァルトブルク城がルドヴィンガー家の居城となったのも彼の統治下であった。1217年4月25日にヘルマンはゴータで没し、アイゼナハの聖カテリーナ修道院に埋葬された。息子のルードヴィヒ4世が後を継いだ。

(ii) オーストリア大公レオポルド

歌合戦の年のオーストリア公は、レオポルド6世グローライヒェであった。バーベンベルク家のレオポルト6世(1176年-1230年7月28日没)は1198年からその死の1230年まで公位に就いている。第3回十字軍に従軍し、アッコンでイングランド王リチャード一世獅子心王と争い、帰国の途上リチャードを捕らえたオーストリア公レオポルト5世の末子であったが、オーストリア公位とシュタイアーマルク公位の相続方法を定めたゲオルゲンベルクの証書の決定に反して、5世の死後、一番上の兄のフリードリヒ1世がオーストリアを継承し、レオポルトがシュタイアーマルクを得たが、4年後の兄フリードリヒの急逝により両公領は統合され、レオポルトのものになった。父と同じくレオポルト6世は2度の十字軍と1212年のアルビジョワ十字軍に参加し、先代と同じく修道院を設立することで国土を開拓しようと努めた。トライゼン河畔のリーリエンフェルトの修道院が有名で、同地に埋葬された。それと共にフランチェスコ会やドミニコ会といった托鉢修道会も庇護した。施策として新都市の建設や、1212年のエンス、1221年のヴ

ーンに、都市法の付与も行った。

彼の治下、バーベンベルク家のオーストリアは名声の頂点にあり、ビザンツ帝国の皇女テオドラ・アングロイと彼との結婚もこの証拠であろう。歌合戦伝説中のハンガリアのクリングゾールのとりなしも、このことが影響しているのであろうか。十字軍をめぐる皇帝フリードリヒ2世と教皇の不仲の仲介のために滞在中のイタリアで、レオポルト6世は1230年に没した。

文化史上の業績としては、しばしば宮廷を置いたクロスターノイブルクに、ドナウ流域ではゴシックの影響を受けた最初の建築物スペチオーザ礼拝堂を建立した。宮廷には、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ、ナイトハルト・フォン・ロイエンタール、ウルリッヒ・フォン・リヒテンシュタインなどのミンネザンクの作者が訪れ、ドイツ中世文学の大作『ニーベルンゲンの歌』がここで書かれたといわれている。

(iii) テューリンゲン方伯ルートヴィヒ4世

歌合戦伝説ではクリングゾールに「方伯様のご子息」として予言された王子は、ヘルマン1世の後を継いだルートヴィヒ4世(1200年-1227年9月11日オトラント没。テューリンゲン方伯、ザクセン選帝伯在位1217年-1227年)であろう。彼の人生は波乱に満ちたものであった。ルートヴィヒは1200年10月28日に方伯ヘルマン1世の3人の息子の次男としてヴェッラ近郊クロイツブルク城で生まれた。長子が早世したため、1216年のヘルマンの死によって後継者となり、1217年にルートヴィヒは統治を開始した。若年ゆえ付け込まれることが多く、マインツ大司教と不和となり皇帝フリードリヒ2世による仲介をうけるなど初期の治世は不安定であった。その中で1221年にハンガリア王アンドレアス2世の娘エリーザベトと結婚した。このエリーザベトがクリングゾールの予言の姫君である。実際にはエリーザベトは兄ヘルマンの許婚として1211年にヴァルトブルク城にやって来て、方伯の宮廷で共に少年時代を過ごした仲であった。1216年の兄の死によって、兄の許婚と結婚することになったが、このことはこの時代特に珍しいことではなかった*19)。エリーザベトはヘルマン(1222年生)、ゾフィー(1224年生)、ゲルトルート(1227年生)の3人の子をも

うけた。後述するが、後に彼女はテューリングンの聖エリーザベトとして歴史に名を残す。

1221年にルートヴィヒの義兄マイセン辺境伯ディートリヒが死ぬと、甥の辺境伯ハインリヒの後見人となった。これは領土の拡張の好機であり、軍事的圧力をかけニーダーラウディッツまで押し出したが、ハインリヒの母でルートヴィヒの異母姉ユッタの阻止にあった。だが、1226年には皇帝フリードリヒ2世によってマイセン辺境伯領の不慮的封土授与を受けた。代償として十字軍への参加を皇帝に約束せねばならなかった。1227年にルートヴィヒはエルサレムに向かう途上イタリア南部のオトラントでペストに罹患し没した。遺骸はルドヴィンガー家の墓所であるラインハルトブルン修道院に埋葬された。テューリングン方伯の後継者は公式には5歳の息子ヘルマン2世であったが、実質的には弟のハインリヒ・ラスペが担った。彼の治世はテューリングンのルドヴィンガー家の最盛期で、夭折により家勢は衰退に向かった。

(2)「聖女伝説」: 歌合戦と聖女の誕生

(i) テューリングン方伯夫人エリーザベト

さて、ルートヴィヒの妻エリーザベトであるが、方伯夫人として以上に中世では聖女として有名であった。聖女としては11月19日の聖日を持ち、「中世の著名な聖人のひとり。貧者と病人の救済者として、テューリングンとヘッセンの守護聖人、カリタス(慈善)、孤児と寡婦、病人、困窮者、乞食、レース編み女工の守護聖人。図像では薔薇あるいはパンの籠で表され、また乞食にパンや魚を与える図像でも示される。」と説明されている。

エリーザベトはハンガリア王アンドレアス2世とケルンテン＝アンデクスのゲルトルート娘として、1207年にハンガリーのサーロスパタクで生まれた。ハンガリアの危機を回避するために子供時代に方伯の息子ヘルマンと婚約し、テューリングンに送られた。しかしヘルマンが1216年に死んだ際父の方伯ヘルマン一世は最初はエリーザベトをプレスブルクに戻そうとしたが、方伯の後継者ルートヴィヒは彼女と恋仲であったこともあり帰さず、1221年に方伯を継いだルートヴィヒと結婚した。ルート

ヴィヒは彼女が宮廷の浪費への対処や貧者やライ病患者への支援が批判された際にも支持した。テューリングンは東部の不穏な国境地域に多くの問題を抱えており、しかも1227年にルートヴィヒが十字軍の途上ペストで死んだとき、3人の息子の長男ヘルマン2世方伯はまだ5歳であった。そのため、後の大空位時代の対立皇帝となる義理の弟ハインリヒ・ラスペ4世が摂政となり、ここから彼女の苦難の時代が始まる。エリーザベトは、多くの寄進を施し伯家の財政に損害を与えたなどという理由で、ハインリヒ・ラスペによってヴァルトブルク城から追放されたとも、彼女は嫉妬と猜疑心に苛まれ自ら城を去ったともいわれている。

城を去ったエリーザベトはアイゼナハに住居を得られず、叔父のバンブルク司教が身元を引き受けるまでしばし厩に住んでいたと言われている。叔父司教は寡となっていた皇帝フリードリヒ2世との新たな縁談を持ちかけたが、1228年に聖フランチェスコ会の第三会に俗人入会をした。このあたりは貴種流浪譚の常套であり、聖女伝の脚色付けであろう。実際にはエリーザベトは3人の子を連れ、結婚にあたり夫から贈られた領地のあるヘッセンのマールブルクに移住した。1229年にマールブルク郊外に施療院を設立した。そこをフランチェスコ施療院と名づけ、自身も世話人として働き慈善活動に励むが、病人や貧者の看護がたたって、あるいは苛酷な贖罪を課されたとも、1231年11月17日に24才の若さで没する。4年後の1235年に列聖され、聖女となり、彼女の墓のうえに今日のエリーザベト教会が建立された*20)。流布した彼女の奇蹟譚によってマールブルク市は当時ヨーロッパでサンチャゴ・デ・コンポステラに次ぐ最も重要な巡礼地となった。巡礼者の大群は聖エリーザベト教会の墓所に押し寄せ、市は潤い人口も増えヘッセン方伯の首都となった。

また、エリーザベトの夫ルートヴィヒの属していたドイツ騎士団は彼女の施療院を拡張し、1235年から1283年にかけてドイツの最初のゴシック建築となる彼女に献じた教会を建設した。この教会は今日でも教区を中心として活動しており多くの芸術品を維持している。宗教改革時にプロテスタントに転じたヘッセン伯フィリップは、宗教的な求心力を削ぐために

聖遺物であったエリーザベトの遺骨を 1539 年に棺から捨て去った。それにもかかわらず、何百もの教会や多くの修道会、施療院が彼女の名前を冠している。ウィーンの聖エリーザベト女子修道院や生地近郊のカーシャウなどに見られる。

(ii) 聖エリーザベト伝の脚色としてのヴァルトブルクの歌合戦

以上のように、歌合戦にまつわる史伝と、特に聖女となりえたハンガリーのエリーザベトの史伝を見てくると、ヴァルトブルクの歌合戦伝説の成立においては、「クリングゾールの聖エリーザベト誕生の予言」こそ伝説の底流にある伝えられるべき物事ではなかったのかという仮説が提示されよう。すなわち、「1207 年」にハンガリーの王女エリーザベトが誕生したという史実、そのため、1206 年に歌合戦が行われ翌年に決着を見るという物語の設定がなされたのである。エリーザベトは 1211 年テューリンゲンに連れてこられ、歌合戦の主催者方伯ヘルマンの後継者ルードヴィヒと 1221 年に結婚する。ルードヴィヒは 1227 年に十字軍途上にて没するが、この 1228 年の第 6 回十字軍は、イスラムと協調路線を取り教皇と対立する皇帝フリードリヒ 2 世が、外交的手腕によりエルサレムに無血入城した十字軍であった。皇帝の拠点シチリアは地中海を内海とする東西文明の十字路であり、文芸の地でもあった。その後、皇帝派と教皇派の政争はイタリアのみならずドイツをも巻き込んでいくのであるが、そのなかでエリーザベトはマールブルクに救貧院を設立、清貧のうちに 1231 年没し、1235 年に異例の速さで列聖される。

このような時代にあってエリーザベトは、「思惑」によって聖女として祭り上げられ、聖女伝説が流布されていく。たとえば、方伯ルートヴィヒの留守中エリーザベトは、ハンセン病患者を看病しようと、病人を夫の寝台に寝かせた。これを見た夫の母親(ゾフィア)は怒って、息子にこの件を告げた。方伯が確かめようと布団の下を見たら、病人ではなく磔刑のイエスがそこに横たわっていた。あるいは、人々が飢えて難儀していた時、彼女は城の蔵からパンを持ち出しては町に運んでいた。飢饉の年だけに、城内から非難の声があがった。夫は周囲からけ

しかけられ、今日もたっぷり詰め込んだパンを届けようとするエリーザベトに山の麓で、蓋のついたバスケットの中身を見せるようにと叫んだ。彼女は神に祈りながら、蓋を開けざるを得なかった。するとバスケットのなかのパンは、ひとつのこらず薔薇の花になっていたという。そのため、聖女エリーザベトのアトリビュートは、13、14世紀には、書物、教会の模型、出自の王侯身分を表す笏を手を持ち、聖性を表す冠を被る姿であらわされたが、後には伝説の流布に応じて、貧者への慈善心の表現である白パンやパンを入れた籠、乾いた人に飲ませる瓶、ハンセン病者の髪を梳く櫛、薔薇、が徴とされた。

列聖し伝説化した「思惑」の背景は、いわば聖女エリーザベトの裏面といった切り口でも語られよう。渡邊昌美氏は『異端審問』で、おそらくは『ウォルムス年代記』の記述を引き、聖女エリーザベトと異端審問官の菅家に言及している。「苛酷な異端審問を行なった聖職者コンラート・フォン・マールブルクに、師事したのが後の聖女、宮中伯ルートヴィヒ・フォン・テューリングンの寡婦エリーザベトであった。コンラートは聖職者であるが、異端審問を担ったドミニコ会やフランチェスコ会には属さず、マインツ司教座の学監であったといわれている。だが、苦行を求道した彼は他者に対しても容赦なく苦痛による信仰の充実を求め、それが1214年の十字軍の勧説、扇動や、彼を苛酷な異端審問に走らせることとなった。1227年、さらに31年に教皇グレゴリウス9世は彼に書簡を送り、その説教活動を認め、称賛し、彼の補佐者を選任する自由も与えた。コンラートは補佐者にドミニコ会士とも元異端者ともいわれるコンラート・ドルソーと隻眼隻腕のヨハンを選び、恐慌に等しい異端審問の嵐をドイツに巻き起こした。年代記に曰く、「この三人は数多の貴族、騎士、市民を焼き殺させ、あるいは頭を剃らせた(異端の最も軽い審判)。「驚くべきことだが、かなりの数のドミニコ会士とフランチェスコ会士が公然と彼らに加担した。教皇の正式の任命もない彼らから指示を受けて服従し、彼らとともに異端者を焼いた。」その規模はフランスの年代記(『アルベリック・トロワフォンテーヌ年代記』)に曰く、「ドイツ全土にわたり、数えきれぬ程の焚刑が行なわれた。」「かくて兄弟は兄弟を、妻は夫を、主人は召使を密告

した。頭を剃られた者に金品を贈って逃れる方法を乞う者もあった。未曾有の混乱が生じた。」

このコンラートに夫の死後盲目的に師事したのがエリーザベト・フォン・ハンガリアであった。13才で嫁し、22才で夫と死別した彼女は資産を施療院設立にあて、1231年に24才で没する。エリーザベトのコンラートへの師事は、一種エロチックな関係もうかがわせるほど熱烈で、彼の説教に遅参した彼女とその侍女の衣服をはぎ取ってコンラートは鞭打ったという逸話も残っている。これが果たして信仰心のためか、他のためか定かでないが、エリーザベトの死後コンラートは彼女の列聖に尽力し、さらにマールブルクに聖エリーザベト教会を設立し、彼自身もそこに葬られたといわれている。」

「思惑」の一方は、十字軍の失敗により権威の揺らぐ教皇庁直属の異端審問官であり、托鉢修道会などに見られる信仰強制の時代であった。その背景には、新たな布教と教義の引き締め、腐敗の根絶に迫らなければいけない、ある意味、異教的な民衆の心性、キリスト教文化の埒外の宮廷文化や民衆文化の萌芽が見られていたことでもある。リテラシーは教会にあり、教会権力そのものであった。だが、別のリテラシーも沸き起こりつつあった。それは、ラテン語に対しての諸国語でもあり、聖書に対しての物語でもあり、聖歌に対しての歌謡でもあり、キリスト教以前の信仰でもあり、地中海のかなたから導かれてきたものでもあった。皮肉なことに十字軍はこれを促進した。そして、エリーザベトの夫君の仕えた皇帝フリードリヒ2世が、前世紀から沸き起こったこの反キリスト教的文明の頭領と目され、新しい文明の庇護者となった。文学が生まれ、聖戦である十字軍は物語として語られ、聖権は俗権と争う。列聖の多発と聖人伝・聖女伝の生成は、危機感に裏打ちされたプロパガンダでもあった。そしてそこに、俗なる物語を加えることこそ、ゴシックの大聖堂に祖先や異教の神々を怪物として石像化することにも似た、キリスト教の常套手段であったはずである。物語の伝え手である歌人たちも、巧妙に聖化される。オプターディンゲンがタンホイザーになったごとく*22)。

しかし、巧妙な仕掛けにも、傷痕が残された。クリングゾー

ルという存在である。

3、クリングゾールとは何者なのか

研究史上、この不確かな人物について、英独語の代表的な音楽事典は項目を設けている。

『新グローヴ音楽事典』第6版の項では、「ドイツあるいはハンガリーの詩人、伝説的人物。ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルチヴァール』(1200年頃)では創作上の人物だが、この名の詩人は存在したといわれる。『ヴァルトブルクの歌合戦』(1260年頃)の作者は彼を確実な史料に残るミネジンガーとしている。かなり後のマイスタージンガー写本[コルマール歌謡写本のこと]には2つの彼に由来する旋律が記されており、マイスタージンガーによって「12人の古の歌匠」の一人とみなされている。」*23)

『歴史と現在のける音楽 MGG』事典の項では、「中世では様々な名称で呼ばれており、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルチヴァール』中の異教の魔術師がこのクリンショール Clinschor の原型である。1230年迄に成立の作者不詳による〈なぞなぞ〉が、『ヴァルトブルクの歌合戦』の〈君主賛歌〉と結びつき、ヴォルフラムとの論争詩(ひとつの旋律に基づいて歌われるものでロマンス文学でいう〈ジョク・パルティト Joc partit〉すなわち〈ジュ・パルティイ Jeu parti〉)を繰り広げる「ハンガリーのクリングゾール Klingesor von ungerlant」という高い教養をもった「師匠僧 meisterpfaffe」になった。(架空の)クリングゾールの神学・天文学の教養の深さはマイスタージンガーを魅了し、彼を12人の古の歌匠のひとりにまで賛美した。つまり、マイスタージンガーによってクリングゾールは歴史上の人物となり、ヘルマン・ダーメンなどは自作のライヒの10節でクリングゾールの死を語っているほどである。

(《コルマール歌謡写本》f.666a, "黒い調べ swaczer ton"中の)〈なぞなぞ〉の旋律は異なる内容の全部で336の節に付されており、これはローエン格林 Lohengrin やローレンゲル Lorengel の膨大な節も及ばない。さらに旋律は《イエーナ歌謡写本》fol.127d(装飾が施され調性も異なっている)や《アダム・プッシュマンの歌謡本 Singebuch des Adam

Puschman》(ミュンツァー校訂 : G. Münzer, Das Singebuch des Adam Puschman, Leipzig 1906、一部はイエーナと関連)にも残されている。16世紀末の《ペーター・ハイベルガー写本 Peter Heiberger Hs.》にも1曲のクリングゾールの〈夜の調べ nachtweis〉が収録されている(K. J. Schröer, Meistersinger im Österreich, in Germanistische Studien, II, 1875, S. 226f)。]*24)

いずれも歴史資料の根拠ではなく、作品お互いを傍証とする記述である。

上記の指摘のように、クリングゾールの後世への影響は大きく、たとえばマネッセ写本のヴァルトブルクの歌合戦のミニチュールは確かに歌合戦の登場人物が描かれているのだが、14世紀以降加筆と思われる欄外の分類用の歌人名は、確かにクリングゾールの名前である。

実在の人物としてではなく、イメージ化されたクリングゾールの存在が、クリングゾールを創り出す。では、そのイメージ化は、何を示しているのであろうか。言い換えるならば、歌を作り披露する歌人と魔術師という二面性が示す問題である。

グリムでは、歌人(師匠)、魔術師とよばれたクリングゾールの魔術師的側面をよく示すのが、前にも挙げたヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの『パルチヴァール』での「テルレ・デ・ラーブールの公で魔術師。シャステル・マルヴェイレ(魔法の城)の城主」であるクリンショルとしてのクリングゾールであろう。『パルチヴァール』第11巻魔法の城のくだりに登場し、第13巻(655節-660節)では次のように造型されている。「主人公パルチヴァールは、ある日アルニーヴェから、魔法の城の由来を聞かされた。アルニーヴェや、ガーヴァーンの母と妹は、この城の主である魔法使い、クリンショルによってさらわれ、閉じ込められていた。そのクリンショルがどうしてそんなことをしたのかというと、かつて、ジチリエ(シチリア島)の王妃、イーブリスと不倫をしたために、王の怒りに触れ去勢されてしまったからだという。

クリンショルは魔術師ヴェルギリウスの子孫で、虚勢されてからは少々性格が悪くなってしまう、人をさらう厄介な性格の魔法使いになってしまったのだそうだ。魔法の城のあるこの土地は、グラモフランツの父・イロート王が、クリンショルから災い

をこうむることを恐れて差し出したものなのだという。

しかし、そのクリンショルの仕掛けた城の罫を乗り越えた今、ガーヴァーンはこの城の主であり、クリンショルとも和睦したことになるらしい。」*25)

この人物造型には歌合戦のクリングゾールとの、類似の特徴がみられる。

たとえば、「南」。歌合戦ではハンガリーであり、『パルチヴァール』ではテルレ・デ・ラーブール(ナポリの東北テラ・ディ・ラボロ)の公。

「出自」、『パルチヴァール』では「多くの魔法を考え出した人の子孫で、ナーペルス(ナポリ)のヴィルギリウス(ウエルギリウス)の血をひくもの」⇒ウエルギリウスは予言者、12世紀以降は魔術師と見なされていた。

「魔術の心得」、去勢されて、初めて魔法が考え出されたペルジーダー(ペルシャの町か)に赴き、「臨むものは何でもうまく作れる魔法の極意を修めて帰りました。」

これらに共通するのは地中海とキリスト教以前の古代という地勢的イメージである。そこには古代ローマの楽師・芸人ミームスが、ローマ、ビザンツ、アラビアの系譜として受け継がれ、また古代の知識の継承者としての魔術死蔵を想起させる。

また、『歌合戦』と『パルチヴァール』の道具の類似も多い。『パルチヴァール』第11巻魔法の城の魔法のベッド、リート・マルヴェイレ、のくだり、「ベッドには輝く丸いルビーの四つの車輪がついていて、それが動いて走り回る速さは疾風も及ばなかった。」は、歌合戦では魔法の絨毯になり、「また一切の霊を、この蒼穹と大地との間に住む善の霊と悪の霊を支配しています。ただ神が守護したまう霊だけは別でございますが。」はまさにクリングゾールの遣わした霊とヴォルフラムの論争に符号する。

もちろん、〈なぞなぞ〉や歌合戦伝説の作者は、『パルチヴァール』を踏まえて、ヴォルフラムとクリングゾールの論争を加えた可能性も高く、また従来よく知られた物語を挿入することで、歌合戦伝説の「語り物」としての汎用性に利点をもたらしたからとも推測できる。

この『パルチヴァール』と『ヴィルレハレム』、『ティトゥレル』の

記述と歴史的な事件や事実を比類させると、ヴォルフラムは、1170年頃に生まれ1220年頃に死去し、『パルチヴァール』は1200年頃に着手され、1210年頃に完成したことが定説となっている*26)。ヴァルトブルクの歌合戦が1206,7年に本当に開催されていたなら、その前後ヴォルフラムはこの歌合戦を何らかの形でモチーフに加えていたかもしれない。またヴォルフラムはその前後パルチヴァールをヴァルトブルクで歌い語っていたかもしれない。また、この歌により名をなし始めていたかもしれない。

いずれにせよ、クリングゾールは物語の造型として一人歩きする土壌にはあったのではないかと考えられる。魔術師の系譜、占星術師パラケルススにみる魔術師の系譜にクリングゾールの幻像は見られる。そのうえでのクリングゾールの「南」に由来する、「いかがわしい詐欺師／不思議な知識人／アラビア経由の古典に精通」は、あるいは古代ローマ以来の伝統芸能者（ミームス、ヒストリオ[役者・俳優]）としての楽師像、あるいは、ゲルマン民族の芸能者としてのスコープの継承者としてのイメージと重なり、歌謡や十字軍・伝説の語り部としての歌人さらには現世にはびこり始めた芸人楽師イメージの温床となっていたのではなかろうか。クリングゾールの魔力は「魔術師」の力であると同時に、音や音楽を持って人心を操る楽師や芸人の「魔力」でもあった。

では、歌合戦中の歌人の中で、なぜクリングゾールだけが魔力を持つのか。そして他の歌人たちは、彼を「師匠」とも呼んでいる。後世16世紀にはマイスタージンガーたちに範と讃えられ、19世紀にはドイツ文学の始祖ともされたミンネの歌人（ミネジンガー）たちの実像は、ヴァルトブルクの歌合戦の系譜の中にも見られる。『ローテの聖エリーザベト伝』（III,222-235）では、彼らを次のように記述している。「うち四人は領主の館に属していたが、いちばん身分の高いものは書記ハインリヒ[Heinrich Schriber]といい、あらゆる宮廷風文化の真の鼓舞者だった。もう一人はフォーゲルヴァイデのヴァルターといい、この二人は共に騎士[rittere]だった。また一人はツヴェチェンのラインハルトとって、騎士の身分であった。エッシェンバッハのヴォルフラムも同様で、宮廷風の詩を多く

作った。アイゼナハの市民 [burger] 二人も歌を作る心得があり、その一人は歌うことの上 手なビーテロルフ、他の一人はオフターディンゲンのハインリヒ。かれら六人は、詩作の名人だった [meister zu tichten]。』(222-235)。

詩作の名人ではあるが、身分は騎士あるいは従士、市民であり、専業の歌い手・楽師ではない。封建制度の身分社会の中にいる人間の技芸としての歌人であり、いずれにしても宮廷に伺候し与えられた機会に技芸を披露した者たちである。この時代、ウルリッヒ・フォン・リヒテンシュタインをはじめ、トーナメントやこの技芸の練達により、覚えめでたく宮廷社会内で地位を得ていくもの多く、「理想の騎士」という名目上、いや「従士が騎士になるため」の生活上も、歌の技芸は武芸とともに欠かせないものであった。

身分制社会の中にいるミンネの歌人(ミンネジンガー)は同時にキリスト教社会の範疇である。だが芸人楽師(シュピールマン)の系譜をひくクリングゾールはそうはいかない。歌人の「師 Meister」とされた意図は、その影響力からであろうか、キリスト教的封建社会の埒外にいるものへの恐れであろうか(*27)。

そして、13世紀後半ドイツでの聖エリーザベト崇拝の推進役たるドミニコ会による聖女伝説の創造にあたり、ドミニコ会士アポルダのディートリヒの『聖エリーザベト伝』にクリングゾールは現れる。

「当時、7つの城の地と呼ばれるハンガリーに、高名で年間3千マルクの収入のある裕福さにして、若き頃より哲学、文学、神学を修め、降神術、占星術の諸学に通じた男が住んでいた。その名はマギステル・クリンクソール… Habitabat tunc in partibus Ungariae, in terra quae Septem Castra vocatur, nobilis quidam et dives, trium milium marcarum annum habens censum, vir philosophus, litteris et studiie saeckaribus a primaevo aetatis imbutus, nigromantiae et astronomiae scientis nihilominus eruditus. His magister Clincsor nomine…」

アポルダのディートリヒ『聖エリーザベト伝』のクリングゾールは、

もはや単なる魔術師ではない、裕福な諸学に通じた学者である。しかも、見事に魔術師も楽師もキリスト教の器に飲み込んでいるのである。

ここにヴァルトブルクの歌合戦伝説は成立する。歌合戦の本となるミンネジンガーの対話詩(論争詩)をもとに、エリーザベト崇拝を聖女伝説に作り上げ加える際に、ヴォルフラムの『パルツィファル』から魅力的な登場人物(「楽師」たる)クリングゾールを配置し、ヴァルトブルクの歌合戦の脚色とする。そこには、聖女伝説の舞台装置としてのヴァルトブルクと楽師伝説(クリングゾールという魔術師・楽師)としての、聖なるものと人間を結びつける音や音楽家の魔力をも包み込んだ、聖女や奇跡と結びついた新たな伝説を誕生させているのである。

そして、伝説へ

ある政治的・社会的事件を情報として、物語化し、後世には伝説とされ伝えられていく。そこに働く力は、物語化する思惑と同時に、伝説を伝えていく力である。ヴァルトブルクの歌合戦伝説を伝えていく力は、実は歌合戦の登場人物である歌人たちやクリングゾールの発揮したであろう歌の力であった。

また、歌を操るヴォルフラムやクリングゾールなどの宮廷歌人や楽師にしても、19世紀には吟遊詩人(トルバドゥール、ミンネジンガー)や楽師・芸人(ジョングルール)と呼ばれ、伝説の対象となっていく。中世史家ル・ゴフは、フランスの宮廷歌人トルバドゥールの復興について、19世紀のロマン主義によって復活し、地方の言語や芸術の再興運動のオック語圏における展開がこれを助けた。この流れの中で、1883年のガストン・パリシによる「宮廷風恋愛」の創案、1851年からの建築における偽ゴシック様式の「トルバドゥール様式」への命名、1876年から文学史家たちによる「トルバドゥール趣味」の命名など文化的英雄化がすすみ、トルバドゥールは今日でもヨーロッパ想像界にしっかりと根を下ろしたと評している*28)。

一方、クリングゾールに収斂される楽師の伝説化は、中世末期にすでに始まっている。古代ローマのミームスの系譜を引

くジョングルールと呼ばれた芸人・楽師たちは、ドイツ語の名「シュピールマン Spielmann」が示すように「遊び」と関わる芸人であった。「遊び」への善悪の道德観ゆえに、つまりあらゆる職業が神の法に適うものか反するものかで論じられたキリスト教の倫理観において、彼らへの評価は議論され続けていた。詩を吟じ、物語を語り、音曲を奏で踊り、演じ遊び、諸国を経巡る彼らの芸態は、封建制度の中で宮廷という庇護者を得ていただけに、俗世の支配者を指導すべき聖界にとっても、実際のジョングールの社会的身分と同様に境界線上の存在(マージナリティ)でもあった。毀誉褒貶かまびすしい彼らへの視線は、時には旧約聖書のダビデ王に準えられることもあったが、多くの場合教会や社会にとっては蔑視・排斥の対象となりやすかった。そのあたりの事情は、稿を改めるが、12,13世紀にはジョングルールたちへの評価が、やはり教会によって名誉回復される兆しを見せ始める。最初は、聖ベルナルドによる人間の謙虚さの鑑としてのジョングルール像の提示であり、これは13世紀の、特に神の芸人とよばれた聖フランチェスコに代表される托鉢修道会による、彼らの芸である歌を介した笑いと喜びを与える肯定的な面の評価に繋がっていく。封建領主や都市による庇護も、ジョングルールを放浪の周縁者の地位から、定住し仕える宮廷楽師・芸人(ミンストレル)への道を生み出し、ここで歌や奏楽を生業とする楽師と、曲芸などを生業とする芸人に分化していく。実は、このジョングルールたちの名誉回復の過程で、利用されるのが聖母や聖人による彼らへの庇護の物語や伝説であり、彼らも聖母聖人を祭り語り歌うことによって、自らの蔑視払拭に努めるのである。

ヴァルトブルクの歌合戦を語り伝えたものの背景には、語られる伝説のパフォーマンスとしての詩歌、それも旋律付きの歌によってより力を持たせるに長けた者たちの事情があった。自らも登場し、自らの宮廷や社会においての名誉回復をはかる為には、聖人聖女の助けも借りた物語が必要であった。

一方、宮廷歌人とは誰だったのか。15世紀まで音楽のみを生業とする音楽家はいなかった。楽師・芸人で音楽を演奏するものはいた。しかし、宮廷においては、歌の創作にせよ

歌唱にせよ、舞踏にせよ、時には楽器の演奏も、身分のある者の営為としての場はあった。もちろん、宮廷歌人は伝説であり、後世作られた偶像である。ではかれらは誰なのか。文学中の理想の騎士であり、それに憧れる騎士・従士たち、彼らはまた栄達のため生計のため戦いに出る代わりに「トーナメント」を転戦し、恩顧や庇護を求め、文武の技芸を披露し気に入られるように努める。その技芸が、武芸であると同時に、語りであり歌であり音楽であり舞踏であった。

宮廷で出会う歌心のある騎士や従士と、楽師・芸人上がりの宮廷楽師。自らを褒め歌う物語こそが、彼らの現世のいや後世の評価を定める手段である。彼らは、音楽、歌というプロパガンダの武器を持つ。その有用性に気づいたものたちは、宮廷であり教会であった。宮廷や教会はこの頃からまたもう一つの影響力を行使する。伝えられることから、書き残すことへのリテラシーの変容である。リテラシーを支配するものの変遷によってこの宗教的プロパガンダは、近代には「国家」という政治的プロパガンダに、また芸術のプロパガンダは近世の人間的（ヒューマニズム）なるものから、近代の神々しい崇高なるものとしての文学や音楽の「芸術化」に繋がっていくのだが、後の話としたい。

一方で、書き残されえない声や身体による表現が失われていくわけではない。リアリティに則った嘘の構築として物語や伝説は、ハンス・ザックスやシェイクスピアの16世紀の演劇的世界において再現されはじめるのである。

注

(1)ノヴァーリス『青き花』(原題:*Heinrich von Ofterdingen*)岩波文庫版(1939)小牧健夫訳「青い花の続編に就いてテイクの報告」参照。

(2)グリム兄弟については高橋健二『グリム兄弟』(1969)を参照。

(3)池上俊一『狼男伝説』(朝日選書 1995)、とくに聖体の奇跡を参照。

(4)"Wartburg", in: *Dictionary of Middle Ages*, 12 vol., 573a-574a を参照。

本文中に挙げた以外の主要な写本と主要な校訂本は以下である。(ND:現代ドイツ語訳、Md(Mhd,Mnd):原文(中高ドイツ語、中低ドイツ語))

写本 A:《小ハイデルベルク歌謡写本 *Die kleine Heidelberger Liederhandschrift*》~13世紀末シュトラースブルクで成立。ラハマン以来の校訂本に影響。

写本 B:《ヴァインガルテン歌謡写本 *Die Weingartner Liederhandschrift*》~1300年頃コンスタンツで成立、詩人の彩色肖像を挿図に。

写本 E:《ヴュルツブルク歌謡写本 *Würzburger Liederhandschrift*》~ヴァルターの滞在地であったヴュルツブルクで1340-50年に成立。ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデとラインマル・フォン・ハーゲナウの詩を中心に所収。

[MF]:*Des Minnesangs Frühling*. Nach Karl Lachmann, Moriz Haupt u. Friedrich Vogt, neu beschreibung v. Carl von Kraus. Leipzig 1940.

[KLD]:*Deutsche Liederdichter des 13. Jahrhunderts*, Hrsg. v. Carl von Kraus. Bd.1 Text.1952, Bd.2 Kommentar. besogt v. Hugo Kuhn, Tübingen 1958.

[WLK]:*Die Gedichte Walthers von der Vogelweide*, Hrsg. v. Karl Lachmann. 13. Ausgabe, neu Hg. v. Hugo Kuhn, Berlin 1965.

[BSM]:*Die Schweizer Minnesänger*, Hrsg. v. Karl Bartsch, Frauenfeld 1886.

[NHW]:*Die Lieder Neidharts*, Hrsg. v. Edmund Wießner,

3. Ausgabe v. H. Fischer. Altdeutsche Textbibliothek 44, Tübingen 1968.

[Siebert]: *Der Dichter Tannhäuser*, Hrsg. v. Johannes Siebert, Halle 1934.

[KWS]: *Kleinere Dichtungen Konrads von Würzburg III*, Hrsg. v. Edward Schröder. 3. Auflage, Berlin 1959; Leiche, Lieder und Sprüche.

高津春久編訳『ミンネザング(ドイツ中世叙事詩集)』1978年[ミンネザング]

Deutscher Minnesang (1150-1300). Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Auswahl, Ausgabe v. F. Neumann, Stuttgart: Reclam Nr. 7857[2], 1978. (ND. & Mhd.) [Deut. Minnesang]

Minnesinger. In Bildern der Manessischen Liederhandschrift, Hrsg. v. Walter Koschorreck, Frankfurt a. M. (Insel Taschenbuch 88), 1974. (Mhd) [Minnesinger: MS. C]

(5) マネッセ歌謡写本(Codex Manesse)のミニアチュール図像については以下に詳しい。Walther, Ingo F. (Hrsg. und erläutert), *Codex Manesse, Die Miniaturen der Großen Heidelberger Liederhandschrift*, unter Mitarbeit von Gisela Siebert, Frankfurt a. M.: Insel 1988; 6/2001
Karg-Gasterstädt, Elisabeth, *Die Minnesinger in Bildern der Manessischen Handschrift*, Frankfurt a. M. 2000.

(6) Pfaff, Fridrich (Hrsg.), *Die grosse Heidelberger Liederhandschrift (Codex Manesse)*, In getreuen Textabdruck herausgegeben von Friedrich Pfaff, Titleausgabe der zweiten, verbesserten und ergänzten Auflage bearbeitet von Hellmut Salowsky, mit einem Verzeichnis der Strophenanfänge und 7 Schrifttafeln, Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter 1984; 1995 (Textabdruck). の Lxv. Klinsor von vngerlant, Spalten 711-746, 91 strophen

(7) 挿入されたオプターディンゲンによる詩節は以下、

Bitterolf ich sage dir.
 min bispel noch min singen dur din troewen
 niht verbirt.
 swa muse lousent eine katzen an.
 ob du erbissen wirt.
 so mus der musen sin gar vil.
 ir tumben [221a] singer tunt den kleinen
 tiern an mir gelich.
 so sten ich alles in der katzen zil.
 un bisse alumbe mich.
 io het ich zu der duringe herren selbe wol
 die pfliht.
 dc kunic noch keiser niht so rehte werdeklich lebt.
 were der us oesterrich niht
 des tugent ob allen fursten in so hoher wirde
 swebt.
 swer den edeln fursten an gesiht
 us osterrich.
 du menge giht
 sin milte tugent si den adelar gelich.

- (8)グリムの伝説では〈君主賛歌〉22-24節の時系列をばらばらにして再構成している。
- (9) Pfaff(原典)にはオプターディングンの名はない。
- (10) Pfaff(原典)ではヴォルフラム・フォン・エッシェンバハにより詩節となっている。
- (11) Pfaff(原典)には、第1節、第2節、第6節の縄のエピソードを欠落させており、この説との整合性が保たれていない。
- (12) マネッセ写本(Codex Manesse)中原典のPfaffの33-38節は、〈王の姫たちのなぞ Das Rätsel von den Königstöchtern〉1-6に相当する。
- (13) Pfaff(原典)にNasionの名前の表記はない。
- (14) Pfaff(原典)の52節は同様の意味の異版。
- (15) Pfaff(原典)の53節は同様の意味の異版。
- (16) 第57節以下の論争詩は、57 eschilbach; 58 klingsor; 59 eschilbach; 60 klingsor; 61 eschilbach; 62

klingsor;63 von eschilbach;64 klingsor;65 eschilbach;
66 klingsor;67 wolfram;68 wolfram;69 wolfrfam;70
klingsor;71 klingsor;72 wolfram;73 wolfram;74
wolfram;75 herr wolfram con Eschelbach;76 klingsor;
77 wolfjram;78 klingsor;79 klingsor;80 wolfram;81
wolfram;82 wolfram;83 klingsor;84 klingsor;85
klingsor;86 wolfram;87 klingsor;88 wolfram;89
klingsor;91 wolfram による。

(17)本文掲『グリム伝説集』552-567話参照。

(18)Reinhold Schneider, *Elisabeth von Thüringen*.
(Marburg: Elwert-Verlag, 1961)によると、早いうちからその土地に馴染み土地勘を身につけるためには許婚と共に教育を受けることは当時よく行われていた慣習であった。

(19)藤代幸一氏による「ワルトブルクの歌合戦」説明も参照。(藤代幸一「アイゼナハ、そしてワイマール」『バッハ全集 第13巻 室内楽曲』小学館 1997年、所収)。

(20)渡邊昌美『異端審問』(講談社現代新書 1996)参照。

(21)歌合戦前半の主人公ハインリヒ・フォン・オプターディンゲンについては、以下に挙げる代表的な音楽事典の Grove6、MGGとも記述はほとんど同じで、原典はイエーナ、コルマール写本のヴァルトブルクの歌合戦記事が最も多くを語っている。

「1200年頃のドイツのミンネジンガー。オスターディンゲンと間違っ
て表記されることもある。彼について言及された文献史料はほとんどなく、初期の研究者はタンホイザーやハインリヒ・フォン・モールンゲンと同一視したが、おそらくは異なる人物であろう。1260年頃の『ヴァルトブルクの歌合戦』での彼への言及が最初で、そこではヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハやヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデにオーストリア大公の名誉を守るために立ち向かっている。《イエーナ歌謡写本》《コルマール歌謡写本》には彼のものとされるヴァルトブルクの歌合戦の最初の部分の音楽が残されており、後者では〈売買された調べ Gekaufter Ton〉あるいは〈君主の調べ〉の名称が与えられている。コルマール歌謡写本はイエーナに比べて華やかさに欠ける。19世紀にはハインリヒはタンホイザーと同一視されていたため、ヴァーグナーの《タンホイザー》をはじめ、タンホイザーとして多くの文学作品に表された。」(B.Kippenberg, in:

New Grove Dictionary of Music and Musicians, 6th edition, Vol.8, p.444)

「1200年頃、市民の出自でアイゼナッハに住んだとされている。イエーナとコルマール両歌謡写本中の〈君主の調べ〉を含む『ヴァルトブルク歌合戦』第一部の作者である。より有名なミンエジンガーのハインリヒ・フォン・モールンゲン(R.M.Werner, 1881)やタンホイザー(E.T.L.Lucas, "Über den Krieg von Wartburg", in: *Abhandlungen der deutschen Geschichte zu Königsberg*, 1838)と同一視されるきらいがあり、ヴァーグナーはこれを踏襲。伝えられた形ではヴァルトブルクの詩は、ビーテロルフを作り上げ、ラインマル・デア・エルテレとラインマル・フォン・ツヴェーターを混同している。第2部ではヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハが、自ら創作した人物魔術師のクリングゾール(『パルツィファル』)と〈なぞなぞ〉で戦い、ヴォルフラムがすべて説き明かす。この〈なぞなぞ〉の部分が最初にあり、そこに〈君主賛歌〉が結付いてヴァルトブルクの詩は成立した。後世のマイスタージンガーたちはこの創作上の人物クリングゾールを実在のミンネジンガーのハンガリーのクリングゾールとして、12人の古の歌匠の一人とした。そのためこの〈なぞなぞ〉の調べは〈クリングゾールの黒い調べ〉と呼ばれた。ロンペルマン Rempelmann によって、〈なぞなぞ〉にはエルフルトで作られたいくつかの詩節と追悼詩が付加された。〈君主の調べ〉と〈黒い調べ〉は彩色写本の《イエーナ歌謡写本》と、より簡素な《コルマール歌謡写本》に残されている。コルマール写本はイエーナよりも小規模で、新たな旋律は見られないことは〈黒い調べ〉においても疑いもない。」(H.Husmann, in: *Musik in Geschichte und Gegenwart*, Bd.7, Sp.74-75)

(22) Lorenz Welker, "Klingsor", in: *New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 6th edition, vol.10, p.111. H.Oppenheim, 'Klingsor', in: *Die deutsche Literatur des Mittelalters: Verfasserlexikon*, ed.W.Stammler, Bd.2, Berlin 1939.も参照。

(23) U.Aarburg, "Klingsor", in: *Musik in Geschichte und Gegenwart*, Bd.10, Sp.1234.

(24) ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『パルチヴァール』(Wolfram von Eschenbach, Parzival) 加倉井肅之、伊藤泰治、馬場

勝弥、小栗友一訳、東京：郁文堂 1974 などによる抄訳。

また、ヴァーグナーによって 1882 年に初演された舞台神聖祝典劇『パルジファル』に描かれているクリングゾールも、この系譜を引いている。『パルジファル』(名作オペラボックス 音楽之友社)によるあらすじを参考までに挙げておく。

「モンサルヴァートの北側では、護持を命じられた聖槍(十字架上でキリストを傷つけた槍)と聖杯(その血を受け止めとも最後の晩餐の杯ともいわれている)ティトゥレルが、聖杯堂を建て、聖杯騎士らとともに守っていた。しかし、現在の聖杯王であるティトゥレルの息子アムフォルタスは、魔術師クリングゾルに聖槍を奪われ、槍によって受けた傷で病み、床に伏している。かつてクリングゾルは敬虔な隠者であり、聖杯騎士になるべく自らの欲望を克服すべく去勢を行ったが認められず、今では男たちを誘惑する花の乙女たちとモンサルヴァートの南側の城に住んでいる。

第 1 幕

ティトゥレルに仕えるグルネマンツの元に、粗末な格好の女クンドリがアムフォルタスの傷を癒すためバルザム(鎮痛油)を持って来る。クンドリはクリングゾルの魔法によりアムフォルタスを誘惑し、槍を奪わせたのだが、ここでは奴隷のような奉仕者となっている。

そこへ白鳥が見知らぬ少年に射落とされたという騒ぎが起こる。少年は聖杯の領域での規則(動物の殺生を禁じる)を知らぬばかりか自分の名前も知らない。クンドリが少年の父は少年が生まれる前に戦死し、母ヘルツェライデは父のように早死にすることを恐れ、少年に何も教えなかったことを語る。何も知らずに育った少年はある日通りかかった騎士たちに憧れ、母の元を離れたのだが、まもなく母が亡くなったことを聞かされる。

グルネマンツは「共に悩みにて悟りゆく、純粹無垢の愚か者が聖杯王を救済する」という預言を思い出し、少年を聖杯の儀式へ連れて行く。聖杯堂の少年たちの手により聖杯が運ばれるが名を知らぬ少年は、聖杯を目の当たりにして何もいうことが出来ない。グルネマンツは怒って少年を追い出してしまう。

第 2 幕

少年はクリングゾルの勢力圏に足を踏み入れてしまうが、クリングゾルの手下の騎士たちを苦もなく倒す。また花の乙女たちがまとわりつくが、そこへ美しく装ったクンドリが現れ、少年の名、パルジフ

アルを呼ぶ。クンドリはパルジファルを誘惑すべく口づけるが、その瞬間彼にアムフォルタスの傷への同情が目覚める。クリングゾルが投げつけた聖槍も宙に止まり、クリングゾルの城は廃墟と化す。

第3幕

長い年月のあと、ある聖金曜日の朝年老いたグルネマンツは眠っているクンドリを見つけ目覚めさせる。そこへ武器に身を固め、槍を持った騎士パルジファルが現れる。クンドリが彼の足を洗い、パルジファルは彼女に洗礼を与える。

遠くで鐘が鳴り、儀式の時間である。聖堂にはティトゥレルの棺が運ばれ、アムフォルタスが担架に乗って現れる。アムフォルタスは救済としての死を願うが、パルジファルがその傷を負わせた槍を傷に当て癒す。聖杯は輝きを増し、白鳩がパルジファルの頭上に舞い降りる。クンドリは静かに息絶え、パルジファルは新しい聖杯王となる。」

- (25) ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハについては、数多くの伝記研究や研究書がある。また最近の代表的な校訂には、Joachim Bumke, *Wolfram von Eschenbach*, (=Sammlung Metzler 36), 8. vollständig neu bearb. Aufl., Stuttgart 2004 などがある。伝記風に言えば、「ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ Wolfram von Eschenbach(1160/80?-1220 頃): 叙事詩『パルチヴァール』で知られたヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの生涯については、彼自身の作品と同時代の言及からしか跡付けできない。苗字が生地に由来するとすれば、中部フランケン地方アンスバハ南東のオーバーエッシェンバハの出身とされ、今日では生地町のヴォルフラムス・エッシェンバハと名を変えるほどである。マイン河畔のヴェールトハイム伯、ヴィルデンベルク城のフォン・デュルネ伯のもとなど各地の宮廷に従士として仕え、1203年以降しばしばこの時代の有力な文芸の保護者テューリングン方伯ヘルマン(1190-1217)を訪れ、伝説的な「ヴァルトブルクの歌合戦」にもヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデと共に描かれている。クレティアン・ド・トロワの影響を受け翻案した『パルチヴァール』はこの頃 1200-10年に書かれ、未完の叙事詩『ティトゥレル』、武勲詩『ヴィルレハルム』、7つの叙情詩、アルパ(南フランスの暁歌)の手法を用いたターゲリートを5篇残している。最後はヴェールトハイム伯の従士としてエッシェンバハに

滞在し、1220年頃に死亡したとされる。」

しかし、ヴォルフラムの生涯について知っていることはと考えると、自身の作品からのヒントと同時代人の証言に頼らざるを得ない。言説からも実際に無学ではなかったかと読み取れる。しかし事実はこのような言及は特殊な作家という役割によるもので、勃興する宮廷という俗人社会の自覚を表現するものとして尊敬を集めていた俗人詩人の役割をヴォルフラムが果たしていた。しかしその際でも、ラテン語の教養を持っていたかには疑問が残る。作品は、自然科学、地理、薬学、天文といったあらゆる領域の事物についての素材と神学上の議論を一体化したものであり、また同時代のフランス文学の知識もあったことが分かる。ヴォルフラム個人の実在性についてよりも、この時代の書物を残した知識人の典型的、それゆえ伝説的姿も見て取れる。

(26)グリムの邦訳の職匠歌人(マイスタージンガー)の名称は、コルマール歌謡写本の変遷にみられるように「meister」が後のマイスタージンガー(職匠歌人)と誤用された可能性が高い。

(27)Le Goff, Jacques, *Héros et Merveilles du Moyen Âge*, Seuil, 2005. [ジャック・ル・ゴフ, 橘明美訳『絵解きヨーロッパ中世の夢』原書房、2007])

宮廷歌人の伝説化については以下に詳しい。

Haines, John, *Eight Centuries of Troubadours and Trouvères: The Changing Identity of Medieval Music*. Cambridge/ New York, Cambridge University Press, 2004

中世から19世紀にいたる楽師や宮廷歌人、彼らによって描かれた世界についての参考文献を挙げておく。

Dronke, Peter, *The Medieval Lyric*, D.S.Brewer, 1996. [ピーター・ドロクケ、高田康成訳『中世ヨーロッパの歌』東京:水声社 2004]

Gerritsen, Willem P. & Van Melle, Anthony G.(eds.), *A Dictionary of Medieval Heroes: Characters in Medieval Narrative Traditions and Their Afterlife in Literature, Theatre and the Visual Arts*. Tanis Guest(trans.), Woodbridge, Suff./Rochester, N.Y.: Boydell and Brewer, 1998. [orig.: *Van Aiol tot de Zwaanridder*:

Personages uit de middeleeuwse verhaalkunst en hun voortleven in literatuur, theater en beeldende kunst. Nijmegen: Uitgeverij Sun, 1993.]

Heng, Geraldine, *Empire of Magic: Medieval Romance and the Politics of Cultural Fantasy.* New York: Columbia University Press, 2003.

Jackson, W. H. & Ranawake, S. A. (eds.), *The Arthur of the Germans: The Arthurian Legend in Medieval German and Dutch Literature. Arthurian Literature in the Middle Ages.* Cardiff: University of Wales Press, 2000, rep. 2002 by Paul & Co Pub Consortium

Jewers, Caroline A., *Chivalric Fiction and the History of the Novel.* Gainesville, Fla.: University Press of Florida, 2000

Pleij, Herman, *Colors Demonic and Divine: Shades of Meaning in the Middle Ages and After.* Translated by Diane Webb, New York: Columbia University Press, 2004

Tydeman, William (ed.), *The Medieval European Stage, 500-1550.* 〈Theatre in Europe: a documentary history〉, Cambridge: Cambridge University Press, 2001